
絶対女王

哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対女王

【Nコード】

N8506V

【作者名】

哲也

【あらすじ】

近隣諸国から「砂の覇国」と畏怖される大国、千年王国。その国の女王が忽然と姿を消した。王軍を束ねる將軍にして賢人が一人、アルマメイオスは、苦心を重ねて女王搜索の任を請け負う。だが女王の行方はようとして掴めない。神経を磨耗させてゆくアルマメイオスの下に現れたのは、怪異な老人サトウヌースであった……

枯れ井戸、舞い落ちる羽、事件の始まり

荒涼とした地平の彼方から太陽が姿を現し、夜を彩る星星とそれを呑み込む暗い渦は、白みゆく空に消え去ろうとしていた。草花は夜露を弾き、生命を潤す湖の水面は煌く。湖にぼつりと浮かぶ島、そこにそびえ立つ建設途中の巨大な塔の影が、ゆっくりと王都エンジュローグに差し掛かる。砂の覇国、千年王国の一日が始まろうとしていた。

高い城壁と広大な湖に守られた王都。それらを見下ろす緩やかな丘の頂に、白鳳宮ウルスラグナはあった。その外観は両翼を伸ばした水鳥を思わせる。白みゆく空の中、降り注ぐ光を浴びて輝く姿は何処までも美しい。

そんな王宮の一角、昇る朝日の中に一人の若い衛兵が立ち尽くしていた。

彼の前には古びた井戸があった。井戸のすぐ脇には厚みのある板と、荒く切り出された幾つもの石、それに鉄の格子が綺麗に整えられ置かれていた。

嚴重な封がなされていた井戸だ。しかしその奥底には何も無い。乾いた砂が射し込む光に煌いている、それだけだった。

「……これはとんでもないことになるぞ」

まだ幼さが残る日焼けた顔は愕然と凍りついていた。震える声でようやくそう搾り出した彼は、途端、外套を翻らせた。自身の口から零れた言葉に弾かれたように、その場を駆け出していったのだった。

若い衛兵が仲間達の集う詰め所に飛び込んだ丁度その頃、王宮の回廊を女ばかりの白い一団が整然と歩いていた。この国を統べる女王の侍従たちである。麻布のゆつたりとした白い衣装に身を包む女達は、女王の身支度を整える為に静々と寢所へ向っている最中だった。

最初に異変に気付いたのは、色取り取りの花を手にした女だった。女王の寢所から庭園へと続く戸が開け放たれているのを回廊より伺い見て、訝しく思ったのだ。

千年王国の大半は砂漠と荒地で占められている。北西に流れる大河とその支流の流域に平原が広がるのみである。大気は常に乾燥し、降水は極端にすくなく、昼夜の寒暖の差は激しい。その厳しい気候はもちろん、砂上の楽園と呼ばれるエンジュローグとて例外ではない。

日は明けても砂漠を渡る風は今だ冷たい。こんな身も縮む寒さの中、陛下は戸を開いて何をしておられるのだろうか？ 侍従の胸に、何か言いたい漠然とした不安が過ぎった。

その不安は現実のものとなった。

「綺麗……」

最初に女王の寢所に足を踏み入れた侍従は、部屋に入るなり惚けた声を上げた。溢れるほどの光の中を幾重の真白い羽が舞い落ちてゆく。そんな幻想的な光景に目を奪われたのだ。

だが次ぎの瞬間には、侍従は顔を凍りつかせ、手にしていた水瓶を落としてしまった。

派手な音を立てて、水瓶は割れて砕けた。陶器の破片が床に散らばり、水は磨かれた石床を広がってゆく。

『侍従の不始末は主の恥』

それは侍従たちの胸に、常に在らねばならない金言であつた。中でも一際高い意識を持ち、自らへの厳しさと主への忠実さを誇りとする、選りすぐられた彼女たちにはなおのことに。であるからこそ、その失態は無理からぬことだったのだ。

乱れた寝台の上、裂けた枕から溢れ出した羽毛が、風に吹かれ舞い落ちていた。只ならぬ何かが起こったことを告げる部屋。そこには、彼女たちが深い敬愛をよせる主の姿は何処にもなかったのである。

賢人会議

突き立つ剣。それに絡みつく、うねり混じりあう白と黒の二匹の蛇。力と神秘を表した千年王国の紋章である。

何時もであれば壁に掲げられたその旗の下に、象徴たる人物は座っているはずだった。しかし一段高く築かれた離れの席には、今や誰の姿もない。それが一体どういう意味をもたらすのか、アルマメイオスはまたひとつ理解できたように思えた。

鋭く精悍な顔に苦渋の色が深く滲む。

「もうよかろう」

激する感情を抑えきれず、彼は低く静かに声を荒げた。

アルマメイオスは二十九歳。燃えるような豊かな赤毛、人を圧する鋭い眼光、鍛えこまれた隙ない風体と、正に獅子とあざなされるに相応しい武人である。その人となりは謹厳実直で女王の信任厚く、実績は王国にあつて武勲比類ない。王国の常備軍『王軍』を預かるに相応しい、堂々たる將軍であつた。

それほどの男の静かな一喝は、王宮の一室に満ち満ちていた怒号と罵声を瞬く間に静まり返らせた。円卓を囲むこの国を担う錚々たる顔ぶれが、一同に口を閉ざし俯いている。口惜しそくに、また恥じ入るように。

彼らがそこまで我を忘れ、激昂し、互いを口汚く罵りあっていた理由。それは、

「陛下の忽然とした失踪、これは誰の責任に所存するものなのか」
ようは失態の擦り合いである。

なんと醜く不毛な茶番劇であろう。明け方から続いた宮中の混乱がようやく沈静化し、こうして話し合いの席が持たれたばかりだというのに。ましてこの場にいる誰より早く宮中に駆けつけ、事態の収拾にあたったのは他でもない、アルマメイオスなのだ。普段であれば表立った発言を控える彼が、怒りの一片を垣間見せたのも無理もない。

「いま少し、実りのある話をするでしょう」

自分を含め、皆が冷静であることを促すと、アルマメイオスは背後に目をやり合図を送った。壁際に控えていた者が円卓へと歩み寄る。朱色のチュニツクに鎖帷子を重ね着た屈強な男だ。腰元には左右それぞれに曲刀を備えている。

すると、ふいに円卓を囲む者の中から、甲高い声が爆ぜた。

「増長がすぎるぞ、アルマメイオス！」

そう立ち上がったのは、一際派手な長衣で身を飾った青年だった。うんざりだと言うように、アルマメイオスは表情を曇らせる。

「何か申されましたかな、エルファダ卿」

「白々しい。貴様はこの会議をなんと心得ている！」

声ばかりが大きい、七つ離れた若輩者がそうなじる。不快さは隠しようもなく、將軍の顔には再び怒気が宿った。それでもアルマメイオスは口を閉ざした。黙ってエルファダの主張に耳を傾ける。

「貴様も賢人の一人ならば掟は知っていよう。この賢人会議に出席

が許されるのは、女王陛下と我ら十二賢人、そしてあの哀れで醜い道化師だけだ。それ以外の者が会議に出席すには、陛下ご自身の裁断が必要だ。如何に王宮の警護を取り仕切る近衛長とて……」

と、何事かに気付き、エルファダの顔が奇妙に歪んだ。私情の恨みを今こそ晴らさんと、憎しみと喜びとが入り混じった暗い情念に突き動かされる。アルマメイオスに向けられていた矛先は突如脇へと逸れ、呆れた素振りを見せる偉丈夫へと向けられた。

「そうだ、オルセト！ 貴様だ！ 陛下をお守りするのは貴様らの役目ではないか！

なんたる不備！ なんたる怠惰！ なんたる失態！ おめおめとよくもこの場に顔を晒せたものだ、この恥知らずが！ 伯父上、責任はこの——」

「五月蠅い」

端的で鋭い声が飛んだ。未熟な小僧。今までそう軽視され、冷笑されてきた男の無礼なまでの言い草は、エルファダを啞然と呆けさせた。その間拔けた表情を見て、今度はアルマメイオスが嘲笑う。

「いや失礼。ただ陛下がこの席に居られたのであれば、貴殿のことをそう断じたであろうと思つてな」

「違うない」

脇に控えるオルセトが笑った。嘲笑の輪が広がる。慌てふためいたエルファダは、助けを求めるように円卓の一席に目をやった。

「まあまあ將軍。そうエルファダを苛めてくれるな。お前たちもそ

うだぞ。これ以上、下らぬ言い争いを招くような真似をするな。今はそのような時ではない」

その男の口ぶりは、甥を庇い、皆を諫め、アルマメイオスをあと押ししたかのように聞こえた。だが獅子とあざなされる將軍の目は、なお鋭さを増した。

その目が告げていた。

「その下らぬ言い争いを焚き付けたのは貴様ではないか」と。

心臓を鷲掴みにされそうな眼光だったが、男に怯んだ様子はない。肥大した体に合わせて作られた、一際大きく立派な椅子に持たれ掛かり、血色の悪い弛んだ頬を歪ませふてぶてしい笑みを浮べている。まるで、

「足下をじゃれつく犬ころに、何を恐れようものか」とでも言うかのように。

この不遜な男、名をトルバザードという。国内に大きな影響力を持つ、『三公』と呼ばれる貴族の筆頭であつた。

千年王国の暦は、現在八百七十一年。興亡する国々の中でも最も古く、類を見ない王政と言われている。その歴史は戦いに彩られてきた。迫害から逃れ水辺へと流れ着いた者たちが、近隣諸国に無視しえぬ影響を及ぼすまでにのし上がってきたのだ。並々ならぬ道を歩んできたことが窺い知れよう。

そんな波乱に満ちた王国には、綺羅の星の如く英傑が存在した。中でも有名な者が、中興の立役者と呼ばれる三人の傑物である。

この三者は、外圧を退け、財政を改革し、治安の回復に務め、末期的な危機にあつた王国に安定と発展をもたらした。その多大なる功績が称えられ、彼らは建国以来初の諸侯となつた。これが三公である。以後、三公は、王国最高の家格とされ、諸侯を束ねる筆頭格

とされてきた。

トルバザードは、今ではたった一人の三公である。長い年月の中で三公は、うちひとつは早々に廃れ、ひとつはいまひとつと交わり、そうして一つの家の為にある爵位となったのだ。

トルバザードは信じている。この血は金剛石のように、長い年月によって磨かれたもののだと。そしてその血が流れる自分は、選ばれた者なのだと。だからトルバザードは恐れはしない。どれ程の功績を立てていようと、謂れの怪しい下級貴族であったアルマメイオスなどに。躊躇いもない。人々の心を秤にかけ弄ぶことに。女王陛下と同じく、私もまた生まれながらの支配者である、そう信じるが故に。

従順な協力者には程遠いこの男に、何度煮え湯を飲まされてきたことだろう。それでもアルマメイオスは、内心たぎる激情を押さえ込んだ。今この時にこの男と争うことは、無益をすぎて害にしかないと理解していたからだ。

「……さて、指摘された私の掟破りの件は、いずれ無事帰えられる陛下のご判断を待つとしてだが……」

これ以上の揚げ足取りは御免こうむるとばかりに、アルマメイオスは一同を睨み渡し話を続ける。

「此処に近衛長オルセトを招いたのは他でもない。陛下の失踪の原因を探るためだ。

『昨晚この王宮で何が起こったのか？』

まずは皆でその事実を確認することこそが、原因追求への第一歩となるだろう」

アルマメイオスの視線を受け、オルセトは一步前へと歩み出た。彼は朗々たるよく通る声で、昨晚の警備状況を報告し始める。その内情は驚くほど詳細なものだった。警備にあたっていた衛兵のみならず、侍従や女官たちの行動までも把握し、まとめられていたのだ。しかし詳細すぎる報告はかえって落胆を呼んだ。昨夜この王宮で不審な出来事など毛ほどもかったことが明らかになったからだ。

「では陛下は何処へ消えてしまったというのだ。隙の無い警備の中、忽然と姿を消してしまえるなど有り得ることなのか」

トルバザードが憮然とした声を上げた。一同がますます厳しい顔を浮かべる中、オルセトがすました顔で言った。

「それについては、気になる噂がひとつ」

「噂？」

「はい。三公殿はこの王宮に、今は使われていない枯れ井戸があるのをご存知ですか」

「いや初耳だが」

「なるほど。あなたほど王宮に詳しい御仁でも知らぬことがあるのですな。まあそれも無理からぬことかもしれません。実はその井戸とは王宮の東端、陛下ご自慢の空中庭園の丁度真下辺りにあります。近寄るのも憚られる所です。各言う私も、つい先ほどその存在を知ったほどですから」

「……だからその井戸がどうしたと言うのだ」

自尊心をくすぐられたのだろう。トルバザードの丸々とした指が、苛立たしそくに卓上を弾いた。オルセトはわざとらしく首を竦めて見せる。

「驚くことに、どうもこの井戸が牢獄代わりに使われていたようなのです」

「牢獄だと!？」と、変わってアルマメイオスが声を上げた。

「庭園と陛下の寝所は扉ひとつで続いているのだぞ？ 如何に人の手の届く高さではないとはいえ、何故そのような所に牢獄など」

「ああ。まったく腑に落ちん。一体誰がそんな提案をしたのか……」

神妙な顔で頷くオルセトに、アルマメイオスは呆れた顔を浮かべた。「何を他人事のように。王宮の警護はお前の役目ではないか」そんな言葉を口に仕掛け、こらえて自重する。今ここで彼を糾弾してしまつては、自ら間抜けぶりを露呈させてしまったエルファダと何も変わらない。

しかしオルセトは、アルマメイオスの気遣いを台無しにしてみせた。

「そのような顔をするな。こいつは言い訳だがな、俺がこの職についたのはつい一ヶ月ほど前のことだ。前任のウィダルナ老の突如の病死の為、引継ぎらしい引継ぎもなくだぞ。まったく、闇の中で手探りをしているかのような一ヶ月間だった。その割にはよくやっていたと、自分を褒めてやりたいほどだがね」

ぬけぬけと居直るオルセトに、非難を込めた視線と言葉が突き刺さった。だが平然とした態度は微塵の変化もない。むしろこういった状況を楽しんでいる様子にさえ見える。流石は数々の戦場を渡り歩いてきた元傭兵。この男を近衛長の地位に就ける際、風紀を著しく乱すとして、どれだけの反発を招いたことか。しかしこの気骨あればこそ、陛下はオルセトを近衛長として迎え入れたのであろう。だが……

少しは時と場所を考えてほしいものだ。気苦労の絶えない將軍は疲れたように首を振り、そして尋ねた。

「それで、牢獄には一体何者が囚われていたのだ」

一転、オルセトはまじめ腐った顔で答える。

「怪物だ」

「怪物!？」

「ああ。この混乱の最中、その怪物までも忽然と姿を消している。きっとそいつが陛下をかどわかしたに違いない。事情を知る者の間では、そんな噂が実しやかに流れている……」

馬鹿げたことを！ 誰もそう一笑に付すことはなかった。笑えるはずがない。誰も脳の裏に、黒々とした毛に覆われた醜い獣の姿が浮かんでいたのだから。

「まさか悪鬼か」

「それがどうもそうではないらしい。実際に俺も見たことはないか

ら詳しくは分かんが、聞くところによるとそれは人の倍ほどもある巨体で、姿たるやおぞましく、とてもこの世に在っていいものとは思えないものらしいのだ」

議会議室にうすら寒げな囁きが行き交う。まさかこの王宮に、そのような得体の知れないものが囚われていたとは……。そんな不安のざわめきは、波のように徐々に高く広がってゆく。そんな中、アルメイオスは腕を組み黙って考え込んでいた。オルセトの報告に違和感を覚えたのだ。しかし、トルバザードの何処か芝居がかった声に思考の糸は断たれた。

「どうやらその噂とおり、女王陛下はその怪物に連れ去られたと見て間違いなからう。なんとおいたわしいことだ。すぐに搜索隊を編成し事にあたらせねば……」

悲壮なまでに表情を曇らせていたトルバザードだったが、突然勢いよく席を立つと、その顔は一転、上気したもののへと変わっていた。

「どうであろうか。このような非常時であればこそ、誰かが皆を率いなければならぬ。ならばその大役、このトルバザードが勤めよう。異論はあるまいな」

胸に手を当て熱の籠った声を上げるトルバザードに、アルメイオスは舌打ちを禁じえなかった。トルバザードの考えがあまにも見え透いていたためだ。この男は救国の英雄を気取りたいだけなのだ。肥大した権力欲を満たしたいだけなのだ。まるで子供のような男……。このような者に、一時とはいえこの国の命運を委ねるわけにはいかない。

だがアルメイオスが幾ら抗しようとも、トルバザードによる権

力の手中を阻むことは出来なかつただろう。円卓を囲む残りの十人の男たちが一斉に賛同の声を上げたからだ。

……いつその場で、この者たちの首を刎ねてしまおうか。

アルマメイオスの中で、そんな危険な思考が孕んだ。脇に控えるオルセトと目が合う。かつて戦場で共に肩を並べ戦った戦友は、アルマメイオスの表情から何かを読み取つたのだろう。携えた曲刀に軽く手を沿え、いたずらっ子のように片目を閉じて笑って見せる。異様な殺気を漲らせて。

ここに居る十二人の代表者たち。国政を掌る「十二賢人」と呼ばれる彼らによつて、国の指針は決定される。何時からだろうか？この顔ぶれが変わらなくなつてしまつたのは。他者を排する下らない掟が出来てしまつたのは。大貴族と呼ばれる者たちによつて、何もかもが占有されるようになってしまつたのは。

今や国は不満の声で渦巻いている。それは何故か？ 不平等だからだ。この会議を支配する大貴族たちが国を食い物にし、自分たちばかり肥え太つてゆくからだ。不平等であれば不満が生まれる。不満は国の衰退を呼び、衰退は他国をつけこませる。争いの種が生まれ、国が疲弊する……。

そんな悪循環の状況に風穴を開けたのがアルマメイオスだった。十二席のひとつを譲り受け、今こうして此処にいる。「未熟な小僧」そう揶揄されながら、沈黙でこの末席を守つてきたのはなんの為か？

アルマメイオスは僅かに首を振つてみせた。今ここで自分が暴発するわけにはいかない。疼く心を封じ込める。それに一役かつたのは、慧眼な老人の言葉が脳裏を過ぎつたからもあったが。

『ぬしはどう見るか知らんが、公はあれで無欲な方よ。あやつが求めるのは名。実ではないのだから』

「ならば私には、陛下搜索の指揮を取らせていただきたい。どうであらうか、トルバザード公」

アルマメイオスは席を立ち、トルバザードにそう語りかけた。たちまちトルバザードの顔が破顔する。

「おお、アルマメイオス殿が指揮を取るとは、これほど頼もしいことこの上ない。一任しよう。いや、是非ともお願いしたい」

トルバザードの反応は当然であつたろう。アルマメイオスという後ろ盾は、何よりも得がたいものなのだから。

国内に大きな影響力を持つ貴族の筆頭と、近隣諸国にその名を轟かせる獅子將軍。この二人が手を結んだのであれば、他の者から異論が出ようはずもなかった。

こうしてこの賢人会議によつて、仮初ながらもトルバザードは王国の頂に立ったのである。

獅子と狂人 1

女王の搜索がアルマメイオスの指揮の下、迅速に、かつ能率的に行われて六日目が過ぎようとしていた。

日が落ち人気の消えた部屋に一人残り、アルマメイオスはまんじりともせずに吉報を待っていた。彼の眼前にある卓上には、王都の大地図が広げられている。地図は七十七の地区に線引きされ、すでにびっしりと文字が書き込まれていた。彼の下に届いた報告の数々である。しかしながらそこには、成果と呼べるようなものはまるでなかった。

「……やはり解せぬ」

そうして席を立ったのはどれほどぶりだったろうか。アルマメイオスは重い腰を上げると、よろけるようにして窓辺へと歩み寄った。

王都の迷路のような路地を駆ける松明の篝火が見える。日が落ちてもなお、兵士達によって女王の探索は懸命に続けられていた。その様子を眺めながらアルマメイオスは、もしや自分は大変な間違いを犯しているのではないか、そんな疑いを覚えだしていた。

女王の失踪。これが世間に漏れようものなら国内の大混乱は必死であった。事態を知る者たちには厳しい緘口令が如かれ、未だ多くの人々が事の重大さを知らされていない。それは勿論、搜索にあたっている兵士達にも。ではアルマメイオスは、兵士達に何の搜索を命じているのだろうか？

怪物である。怪物の行方を探させているのだ。

千年王国のみならず、ヨルグ、カズアテード、イシュリア……。どの諸国の者も、怪物という言葉には敏感にならざるおえないだろう。それは容易に悪鬼を連想させるからだ。子供のように小柄で、鋼のような肉体をし、濃い体毛に覆われた鬼を。

悪鬼は徒党を組んで人を襲う。男を殺し、女を犯し、子供を貪り、ありとあらゆる災厄を撒き散らす。この鬼の前にどれほどの民が滅ぼされただろうか。

人々は悪鬼の恐ろしさを嫌と言うほどよく知っている。だからこの王都にそれらしきものが紛れているやもしれぬとなれば、こぞって情報を投げ出すに違いない。アルマメイオスの働かせた機転は、機密を守り情報を集める最上の一手だったろう。

にもかかわらず一向にそれらしい情報が出てこない。人の倍ほどもある巨体で、見るもおぞましい姿をしていると言う、そのような目立つ姿をした怪物の目撃者が。

なにか重大な見落としがあるのかもしれない。改めて地図に目を通そうとしたアルマメイオスは、驚きと嘆きの入り混じった唸り声を上げた。文字が滑るように、まるで頭の中に入っていないのだ。それほどに神経は消耗しきっていた。

「ぬし、酷い顔をしておるぞ」

暗がりの中から、突然そう声が響いた。疲れ果てた頭を振るい、それでも懸命に地図を凝視していたアルマメイオスは、驚き顔を上げる。そこには杖をついた一人の男が佇んでいた。

怪異な老人であった。

峯れ禿げた白髪、不自然にぎよろついた大きな片目。その半面は引きつり赤黒く焼けただれている。顔はおるか、体の方も異様である。枯れ枝のような体が更に小さく、無理矢理折り畳まれてもしたかのように見えるのだ。それほど背骨は不自然な弧を描いていた。

「貴様が、サトウヌース……」

たちまちアルマメイオスの顔が不快に歪んだ。その様を見て、如何にも小気味いいとばかりに老人は笑う。

「なんたる顔を浮べおる。せつかくぬしの良き友が訪ね参ったというのに」

「貴様を友とした覚えはない」

「左様か。未だわしの片思いと言ったところかの」

にべもない返事にこたえた様子もなく、ゆらり、揺れるような足取りで老人は歩み寄った。そして、「ほれ」と青白い瓶を掲げてみせる。

「なんだそれは」

「無論、酒よ。この世の苦悩の全てを背負い込んだような顔をしておるぬしには必要なもんじやろう。どうだ。気晴らしにやろうぞ」

「いらぬ」

「遠慮するな。わしの物ではない。女王の寢所から拝借してきたものだ。流石に偉い御仁に差し出されるだけある。とびきり美味いぞ」

「失せるサトゥヌース。貴様にかかずらっている時はない！」

アルマメイオスは一喝した。「押し寄せる大軍をも怖気つかせる」、そう評された獅子の咆哮である。しかし老人の顔に臆面は微塵もない。それどころか飄々と笑っている。

「流石はあの陛下を激昂させた狂人よ……」

老人の忌諱するあだ名を、アルマメイオスは憮然として呟いた。

サトゥヌース。女王の傍に常に影のように在る醜い道化師。このみずばらしい老人が、かつて押しも押されもせぬ大貴族であったなど誰が想像だにできよう。王国の北西部、大河近郊の肥沃な大地を所領とし、加えて領地にはヨルグ、カズアテード両国を結ぶ大きな交易港を抱えていた。

これら豊かさを背景とした権勢は、トルバザードですら一目置かざるをえなかった程だ。しかしその栄華は脆くも潰えた。北端の隣国、ゴドー王国の侵攻に遭い、所領の全てを失ってしまったのである。

今やサトゥヌースは道化を演じることで、どうにか自分の居場所を作っていた。好む好まざるなどない。そうしなければ野垂れ死ぬしかないのだから。しかしそれも危うい事態だ。物好きな女王の消失は、この老人の未来を閉ざそうとしていた。

だからこそ俺に擦り寄ってきたというわけか。

冷徹にそう見透かしたアルマメイオスだったが、それはそれで頭の痛い所だった。サトゥヌースを無下に出来ない理由があったからだ。

地方の貧しい下級貴族であつたアルマメイオスが、今ある地位へと駆け上がるには実力と功績だけでは足らなかった。背中を後押しする大きな後ろ盾が必要だつたのである。何の約定を交わしたわけでもない。どいう理由があつてか、サトウヌースが進んでその役割を果たしたのだ。

その献身性は度が過ぎていたと言えよう。陰日向にアルマメイオスを支え続け、ついには最後の抛り所である賢人の地位さえも譲つてしまつたのだから。

それほどの大恩があるにもかかわらず、不快。ただただ不快である。この老人から受ける印象は。感謝の気持ちは勿論ある。何より自分がこれほど不義理な人間だと思いたくない。しかしそれでも感じてしまうのだ。見た目の薄気味悪さ、それ以上の言い難いおぞましさ。

或いはそのおぞましい何かの為に、俺はこの地位にまで引きずり上げられたのではないか？

なんの確証もない馬鹿げた疑惑は頭から拭い去れず、ならばせめて無用ないざこざが起こらないよう、できるかぎり近辺から遠ざけるよう努めてきた。

しかしここにきてアルマメイオスは、これまでの態度を軟化させた。

「……それで、貴様が俺に何用だ。まさか盗んだ酒の共犯者を欲したわけでもあるまい」

問答無用で突き放し、部屋から叩き出すことも出来たはずだ。し

かしそうはせず、敢えて受け入れようとしたのだ。結局のところ非情に徹しきれなかったと言えはそうなのだろう。だがそれだけが理由でもなかった。

不快な悪感情はどうあれ、アルマメイオスはサトウヌースを高くかつていた。卓越した知識、物事の本質を鋭く見抜く眼、神算鬼謀……。この老人は精兵を誇ったゴドー王国を内側から崩壊させる絵を描き、それを見事に実現させてみせた。領地を踏み躪られた屈辱を、知恵と舌先だけで雪いだのである。王国屈指の恐るべき謀略家。その様な男であればこそ、この非常時に頼るところは大きい。アルマメイオスはそう踏んだのだ。

「そうよの。ぬしと共に酒を頂くのであれば、やはり祝いの美酒が相応しかろう」

サトウヌースはそう言うとおもむろに酒瓶の蓋を開けた。咎めるでもなく、旨そうに酒を仰ぐ姿をアルマメイオスは冷めた目で睨んでいた。

そうして人心地ついたサトウヌースは、熱い息を吐き出し言った。

「時が来たぞ、アルマメイオス」

「……なんの時がだ」

サトウヌースの熱を帯びた声とは裏腹に、アルマメイオスの態度は何処までも冷め切っていた。そんな温度差など承知のことだったのだろう。サトウヌースは酒瓶を床に置くと、懷から何かを取り出し卓上に向かって放り投げた。

手を伸ばして取ったそれは、色褪せた羊皮紙だった。どうやら誰

かに宛てられた手紙であるらしい。手頃なパピルスではなく高価な羊皮紙を使うとは、相当重要な意味を持った手紙のようだ。

目を通すことに抵抗を感じ、アルマメイオスはちらりとサトウヌースを伺った。サトウヌースは酒瓶を拾い上げてまた一杯やろうとしている。短く軽いため息を漏らし、アルマメイオスは視線を手紙へと落とした。

途端、日焼けた逞しい顔が青ざめ、凍りついた。

「何故……」

「何がだ」

「サトウヌース！ 何故貴様がこれを持っている……！」

薄笑いを浮かべ、サトウヌースは再び酒を仰いだ。より饒舌にならんが為に。

獅子と狂人 2

西峰百騎の頂点にして「ゴドーの守護者」と謳われた名将エストラゴン。彼はアルマメイオスの戦いぶりを見て、「正しく獲物を狩る獅子だ」と感嘆の声をあげたという。

どれほどの窮地であろうと眉一つ動かさず戦況を睨み続け、好機と見るや一転、軍を率いて猛然と襲い掛かる。黒塗りの矛を携え、同じく黒塗りの外套を翻し、赤髪を振り乱して縦横無尽に戦場を駆けるその姿は、味方にとってはこの上なく頼もしく、敵方にとっては不吉の象徴そのものだったろう。

それほどの堯勇の者が顔を青ざめ、引きつった声を張り上げていた。

「どうして貴様がこれを……！」

「そう怒鳴るな。ぬしの張り上げる声はこの年老いた耳にも障る」

顔を顰め、サトゥヌースは酒瓶を床に置く。もったいぶったかのような遅延な動きは、なおアルマメイオスの苛立ちを加速させる。それすらも見越して、サトゥヌースは不適に笑った。まるでいたぶるのを楽しむかのように。

「さて、その手紙の中身。何者かが女王へ宛てた匿名の上申書じゃ。内容はこうある」

サトゥヌースは手紙を諳んじ始めた。

……現在我らが王国は並ぶものなき大国と位置づけられている。だが、実を言えばそれは見栄えだけにすぎない。まるで張りぼての虎である。

かつて九つの部族を制圧し、「天上に星静かに喰われど、地に砂の嵐吹き荒れ眠ることもあたわず」と恐れられた武威は最早なく、弱体の一途を辿るばかりである。その原因は特権階級の氾濫、つまり貴族の乱立にほかならない。

『かつて三公』の発布した所謂「切り取り自由」の約定は、戦いの意欲を湧かせ、戦果を平等に応じたものかと思われた。だがしかし、それが今や様々な弊害を招いてしまっている。

そもそも我が国は豊穡な土地とは言い難い。北に流れる大河に支流を築き灌漑が進められてはいるが、大きな成果が伴っているのは王都エンジュローグくらいなもので、多くの土地は痩せて荒れ果てている。これら痩せた土地を領地とした貴族は名ばかりの領主にすぎない。何故なら彼らは困窮し、満足に兵士も雇えず、本来庇護すべき領民を守ることさえ出来ない有様だからだ。当然ながら自治権との引き換えである軍役の義務も果たせないだろう。

このような貴族の諸問題は、通例どおり特権階級の筆頭、つまり大貴族と呼ばれる者たちに委ねられることになる。しかしこの者達が全うな調停者であったことなど過去一度としてない。何故なら彼らは常に自らの利にのみ正直であるためだ。貧しい貴族たちの中には高利の金を無理に貸し付けられ、土地を奪われ何処かへと追いやられてしまった者も少なくない。

このように横暴にして、大貴族は日増しに力を高め、権威を増大しつつある。それに反して女王の権威は弱体、失墜しつつある。今や我が国は一枚の大国ではない。先細りする小国の連合体である。

我らと女王との間は、揺るぎない堅い盟約によって結ばれている。

しかしこのまま時が過ぎれば、由々しき事態が起こりうるかもしれない。また他国が付け入る隙ともなるだろう。これらが問題として表面化しない今のうちにこそ、直ちに是正すべきである。地方から中央へ、王権を集束し回復させるのだ。

その為には現在ある統治体制の抜本的な改革が必要となるだろう。具体的には女王の私兵と言うべき王軍を正規の常備軍として確立し、同時に国全体を管理する強い権限を持った組織を作るのだ。そしてこれら官吏を広く大衆より募るのである。困窮する貴族たちには、痩せた土地と引き換えに官職を与えてやればよい。それで彼らの寒い懷は満たされ、同時に名誉も守られるだろう。

乱立する貴族を整え、大貴族の権限を削ぎ落とし、再び女王を頂点とした絶対なる中央集権。それだけがこの国の生きるのこる道である……。

「そしてこの無礼な上申書はこう締め括られる。
『陛下には身分に捉われず、才ある者を用いるようお願いたい。国家の安寧とは血と名によって保たれるのではない。揺ぎ無い集う力にこそ、それはあるのだから』と」

素晴らしい。

険しい顔で押し黙るアルメイオスをじっと見つめ、サトウヌー
スは大げさに手を叩いて見せた。

「大した先見の明ではないか。その上申書が危惧したとおり、我れらは衰えた。争いを招き、愚かな敗北を繰り返した。結果わしは全

てを失い、王国は滅亡寸前まで追い詰められた」

そう物語るサトウヌースの口ぶりには、確かな苦味が感じられた。飄々と道化を気取るこの老人が、己の心情を垣間見せるなど珍しい。ゴドーとの間に起こった紛争は、それほどこの男に大きな影を落としたと言うことか。

然もあらんと同情を寄せたアルマメイオスだったが、それを表に出すことはなかった。サトウヌースが何を目的として近づいてきたのか分からない以上、下手な態度を取るわけにはいかなかったからだ。厚い泥で己を塗り固めたかのように、表情さえも微動だにしない。

「そう構えてくれるな、アルマメイオス」

その様子を見て、サトウヌースは苦笑った。

「何もわしはぬしを取って食おうなどと思ってるわけではないのだ。言うたであろう。わしは時を告げにきたのだと。ただそれだけだ」

「……だからなんの時だというのだ」

頬杖を付き、ただむつとりとサトウヌースを睨み付けていたアルマメイオスは、ようやくそう重い口を開いた。

対してサトウヌースはさらりと答えた。

「変革だ」と。

大それた言葉である。それもこのような折に口にするには。穏やかならざる響きを感じ、アルマメイオスは再び黙した。その顔には流石に鼻白んだものが浮かんでいる。それとは対照的に、サトウヌースの態度は何処までも平然と涼しげである。

「アルマメイオスよ、少しばかり昔話をしようではないか。なに、そう退屈はしません。なんせぬしに纏わる話だでの。

……しかしさて、どこまで巻き戻ればよいものか。ぬしという暁光が現れたあの日の話をするには……」

しばし、サトゥヌースは思案に暮れた。

遡ること五年前、王国暦八百六十六年。国境を境に隣り合わう村同士の、春祭りをめぐるささやかな争いは、やがて両国の領土問題へと発展した。

ゴドー王国の若き王ウラディミールは、外交決着を放棄。短気を諫めるエストラゴンに命じ、サトゥヌースが治めるブルグント領への侵攻を開始させた。

これに対しサトゥヌースは、居城に立て籠り持久戦の構えをとった。西峰百騎と謳われる屈強な騎長が揃うゴドー軍を相手に、討つて出るなど愚の骨頂。城門を硬く閉ざし援軍を待つ。サトゥヌースが下した判断は決して間違いではなかった。

だが援軍は来なかった。

この事態に王国の反応は異常に鈍かった。矢継ぎ早に出した援軍の要請にさえ無反応だった。

劣勢を強いられ、数ヶ月後、サトゥヌースは居城を追われた。

領土一円に睨みを利かせる重要拠点を失い、サトゥヌースの治世は終わった。ブルグント領は瞬く間にゴドー軍に呑みこまれていった。

噂によれば援軍の要請を無視し続けたのは、賢人たちであったという。増大を続けるサトゥヌースの権勢を疎んじ、没落を望んだのであるうと。言わばサトゥヌースは身内から手酷く裏切られたも同

然だった。

しかし裏切りの代償は高くついた。

ブルグント領の悉くが失われて、大貴族たちはようやく重い腰を上げた。

賢人会議は、ゴドー軍の徹底的な壊滅と王国の恒久的な征服を可決。国内の兵士を総動員し、ブルグントの南東、ドーフィネの野にてゴドー軍と会戦した。

その戦いで千年王国は散々たる敗北を喫したのだ。

一方、大勝を収めたゴドー軍は余勢を駆り、更なる進軍を開始。一挙に千年王国を滅ぼさんと、王都エンジュローグへと迫った。

ゴンドワナ大陸を南北に分ける広大な砂漠地帯、サハラ。その「砂漠越え」の起点にして終着点であるエンジュローグは、南北交易の中心地だった。

街の大広場には市が立ち並び、そこで交わされる言葉は挨拶ひとつ取っても数十カ国に及ぶ。取引される物の数はその数百倍にもなっただろう。様々な国から様々な人々が訪れ、様々な物が取引されるこの都は、常に雑多な喧騒と熱気で溢れかえっていた。

しかし会戦後、状況は一変した。

常に関け放たれていた城門は閉ざされ、物々しい装いの男たちで固められた。

市は閑散とし、商いはまるで成り立つことがなかった。

列を作り入国を求めた諸国の隊商や旅人も、酒場を賑やかす楽士や奇術師たちも、男たちを魅了する踊り子たちも、放浪するロマも、皆、姿を消した。代わりに傷ついた敗残兵が次々と担ぎ込まれた。

未来への暗雲が立ち込めるエンジュローグ。市民たちは不安に慄き、泣き叫ぶ者、がなりたてるもの、家にたち籠る者、王都を脱出しようとする者……、状況は混沌と悪化の一途を辿った。

この最悪な雰囲気を払拭したのがアルマメイオスだった。

遠方の貴族であつたアルマメイオスは、ドーフィネの会戦に参戦することができず、遅れてエンジュローグへの入城を果たした。それが幸いした。血と泥に塗れ、這う這うの体で王都へと帰還する敗残兵とは違い、まったくの無傷であるアルマメイオス率いる一団は、その数わずか三十数騎ながらも、何もかもがまっさらで雄雄しく輝いて見えた。

中でも先頭に立つアルマメイオスの姿は一際人目を惹いた。燃えるような赤毛、鋭い眼光、屈強な体、堂々たる佇まい……。その時すでにこの男は、万人の上に立つ風格を備えていた。

噂は噂を呼んだ。

人々は血に飽いていた。暗い話に耳を塞ぎたかった。自信と覇気を漲らせたこの若者は、それを忘れさせてくれるのに好適だった。勇壮なその姿を一目見みようと市民たちはこぞって集い、街道には人々が溢れた。城門からウルスラグナへ、真っ直ぐに伸びる均された道は、さながら過酷な天険となつたかのようにアルマメイオスの行く手を阻んだ。

それほどの人気はついに思わぬ大物を釣りだした。

市街の大広場で女王との謁見が行われることになったのである。

「あの謁見は、今もわしの臉に焼きつき忘れられぬ。ぬしはあの時

言ったの。

『陛下より預かりしもの、今こそ全てをお返しいたす時』と。

ぬしは貴族の地位を返上し、ただの一兵士として女王に身を捧げたいと願った。その純然たる姿に皆が胸を打たれた。ぬしがいなければ、王軍の誕生はなかった。そして恐らく、この国の歴史は途絶えていただろう」

そう言つてサトゥヌスは目を閉じた。瞼の裏に写るのは、女王と、その足下に跪くアルメイオスの姿だ。二人を取り囲む群衆は腕を突き上げ、歓喜の声と共に高らかに叫んでいる。

『私の供に在りて、我と共に滅ぶべし！』

人々は二人に古き盟約を重ね見た。無論サトゥヌスも。そして確信したのだ。この男こそが自分が待ちわびていた者なのだと。

「……十五年ほど前だったか、その手紙を手にしたのは」
目を開いたサトゥヌスは、感慨深げにアルメイオスを見つめた。

「日々山のように届く女王へ宛てられた便り。その大半は目も通さず処分されてゆく。わしがその手紙を手にとったのは、なんのことはない、些細な気まぐれと偶然だった。

しかしその偶然がわしの前途を決定した。

この手紙を読んだ時、わしがどれほど狂喜したか分かるか！ ついぞ現れた。わしらのような私欲に塗れた視野の狭い者たちに変わり、真に国の行く末を憂い定めようとする者が現れたのだと！

だからわしは手紙をすぐさま懷に隠した。これが日の目を見ようものなら、この者は闇に葬られてしまふだろう。それは国家の大きな損失となる、そう思つたからだ。

以来、わしは待った。トルバザード共に抗し、時に取り入り、そうやって力を蓄え地歩を固めながら待ち続けた。いずれ現れるだろ

う手紙の主を！

……そうしてぬしがあらわれたのだ。それも思わぬ形での」

突如激情を露にしたサトウヌースだったが、憑き物が落ちたかのように表情を変えた。その顔には、我が子を見守る父のような、そんな慈愛に満ちたものがあつた。

「あの時、突如現れたぬしという曙光を目の当たりにした時、報われたと思うた。そうして思うた。ぬしが女王に思うたようにの。

最早わしに有るものなど何もないのかもしれない。それでも全てを捧げよう。きつとこの者こそが、次を切り開く者なのだと」

手紙の送り主が誰であるのか、もはや言うまでもなかっただろう。アルマメイオスは震えていた。恐れではない。胸の奥底は言いがたい熱さで満たされていた。幼い義憤に駆られたためた一通の手紙が、己をこの地位へと導いたのだ。しかしそれは大いなる庇護があつてのことだった。俺はこの老人の機転と先見性に守られ育てられてきたのだ……。

アルマメイオスの中の蟠りが氷解した。過去を恥じ入るようにアルマメイオスは小さな老人の前に膝を付き、ただ深く頭を垂れた。そして「すまぬ」と侘びの言葉を口にしようとした。しかしサトウヌースはアルマメイオスの震える肩を抱き、その言葉を遮った。

「頭を上げよアルマメイオス。獅子は誰にも媚びぬ。ぬしは気高くあるべきなのだ。そうであればこそ、皆がお前につき従う」

「誰も……」

「そう、誰もだ。……アルマメイオス。トルバザード共を肅清するのだ」

雷に打たれたかのように、アルマメイオスの顔が跳ね上がった。眼前にある醜い老人を見つめるその顔は、驚きで凍り付いている。しかしそれも束の間、見る見るうちに顔は青ざめていった。

「き、貴様は何を口走っているのか分かっていいのか！ この俺に反逆しろと！ 仲間を討ち、陛下の期待を裏切り、この国を混乱に陥れよと言うのか！」

「混乱？ 違うの。ぬしはトルバザードを玉座に据えて、この国に行く末があると思うか？ あれにこの国を束ねられるほどの求心力があると思うか？ ぬしはわしと同じ過ちを繰り返すか。ゴドーの時のよう、この国を血と不名誉で穢すか」

「……しかし、トルバザードを玉座に据えるのは一時のこと。陛下がお戻りになれば……」

「何時戻る。女王は何時戻るのだ。行方は分かっているのか」

厳しい追求に言葉も返せず、アルマメイオスはただ俯くしかなかった。悔しさを滲ませるように、頬は僅かに震えている。

その頬を、サトウヌースは叩いた。

「顔を上げよ、まだ分からぬか、この愚か者が！ 時間はもう残されてはいないのだ！ 女王は既に何者かの手に落ちた。遠からず未曾有の事態が起こるのだぞ！」

「……まで、それはどういう意味だ。陛下は怪物にかどわかされたのではないのか」

頬を走る痺れと知らされた危地が、再びアルマメイオスの顔に陰しさを宿らせる。致し方ないとばかりにサトウヌースは首を振る。

「やはりお前も信じているのか。あのような戯けた話を」

「何…だと…？」

「ぬしらが下らん茶番劇を演じている間、わしが何処で何をしていたと思う。まさか情眠を貪っていたと思うてか。寢所、詰め所、枯れ井戸……。この目と耳で事の真相を確かめるため、宮中を巡っておったわ。

結論を言っぞ。怪物などおらん。

考えてもみよ。見るもおぞましい姿をした者だと？　なんだその不確かな情報は。女王の寢所の傍に牢獄だと？　ありえん。ぬしらがこれほど血眼になっても影も形も拝めない。奇怪に思わんのか。当たり前だ。そんなものはなから存在せんのだから」

ぐらり、アルマメイオスはよろめいた。張り詰めていた糸が切れ、溜まりに溜まった疲れが一拳に襲う。では一体誰が陛下を？　何の為に？　混乱する意識で考えようとする。だが、思考はふらふらと揺れ、一向に定まらずまとまりを欠いた。今や重圧と疲労がアルマメイオスを支配していた。

「サトウヌース。俺はどうすればいい……」

崩れ落ちるアルマメイオス。その耳元にサトウヌースは囁きかけた。

「任せよ。今はただ眠れ」

獅子と狂人 3

湖を背に栄える王都エンジュローグ。その中心に座するのがアツシヤリフの丘だ。頂には白鳳宮ウルスラグナが。中腹には行政、立法、司法などの機関が集まり、裾野には兵営や軍施設などが並んだ。丘はぐるりと運河に囲まれ、それを渡す橋の先には大広場が開けている。公共施設が建ち、自由な市が許された大広場からは放射状に街道が伸び、それに伴って街並みが広がっていた。

何より圧巻なのが、厚さ3・5ガズ（3・5メートル）、高さ8ガズ（8メートル）、総延長5ファルサング（約25キロ）にも及ぶ五角形の城壁である。蛮族の侵攻、悪鬼の襲来。脅威が寄せる度に、より高く頑丈に改修されてきたこの壁は、今や押し寄せる大軍を相手にも小揺るぎもしない。それはゴドー軍との戦いで証明された。

そのような都の全景を見渡せる場所に立てている。それだけでも彼にとっては誇らしいことだったはずだ。しかし今や彼の目は茫然としている。そこには年頃の少年らしい活力がまるで感じられなかった。

怪物はもういない。なのにどうして、僕は未だに此処へ立ち続けなければならぬのか？

若い衛兵はそのような自問を繰り返していたのだ。

女王が姿を消し七度目の朝がやって来た。状況に何ら進展はなく、それどころか悪化している。アルマイオスが倒れたという一報は瞬く間に丘を駆け巡り、事情を知る者たちの心胆を寒からしめた。しかし幸いにもそれが疲労によるもので、充分に休息を取れば一両日中にも復帰できるだろう、そう付け加えられた見通しが、深い深

い安堵の溜息を誘ったのだが。

そのような状況下にあつて、近衛隊の士気は依然として高い。
「ならば我らが將軍の心労の種を取り払ってやろうではないか！」
意気込みも高く詰め所を飛び出し、女王の搜索の為に方々へ散つてゆく。

そんな仲間たちの姿を、若い衛兵は文字通り「指をくわえて」眺めているしかなかった。羨ましい。自分もその中に加わりたい。そう願つても、新たな命令が下されないのだ。

今もこの井戸の警備を続けなければいけないなんて、意味が分からない。やはり僕は忘れられているんじゃないだろうか？ そんな不安が頭を過ぎる。その度に彼の胸は、叩きのめされた敗北感に似たものに満たされていく。忘れられること。それは嫌われるよりもずっと寂しいことだ。

「ウロス。お前は本当にそんな大それたことをしたのか……？」

青空から封じられた井戸へ。彼の視線は移り、そして幾度目だったろう。思い煩いの溜息は零れた。痩せた小さな背中はずたづたびれて、なおさら弱弱しく映る。そんな惨めな後姿に声が掛かった。

「おい、そのの」

「……隊長殿」

振り返った彼は慌てて姿勢を正した。近衛長オルセトがそこに居たのだ。背後に二人の供人を従えて。

不動の体勢をとる衛兵の表情には、奇異なものを見るような驚きがあった。王宮への出入りは正面にひとつきり。残り三方は塀に囲まれている。そのためこのような裏手に人が訪れるなど滅多にない。こんな面白みのない所に『あの隊長』が顔を出したのだ。余りにもらしくないではないか。

オルセトの年齢は三十一歳。アルマメイオスより二つ年上である。短く無造作に切られた黒髪と無精髭。彫りの深い顔立ちには野性味と愛嬌が同居している。長身巨軀で、彫像のような均整の取れた肉体美も相まって、女性たちには大変好かれた。一方、男たちからの評判はすこぶる悪い。その理由は、実に多彩な異名から読み取れるだろう。

「鬼人」

「双刀の鬼」

「陽気で孤独なひねくれ者」

「軽薄と酔狂の愛人」

「怠惰と怠慢の息子」……。

なかには「ろくでなし」や「穀潰し」「歩く下半身」などという異名というより陰口の類いのものまであるが、これらはまだ人情味が感じられるだけましであろう。

「オルセトには類い稀なる武才があった。しかし人の鑑となる美德はひとつもなかった」

この容赦の無い人物評は、オルセトに「反面教師」という新たな異名を背負わせることになった。

陽気に人々を煙に巻き、ふてぶてしい態度で敵を作り、義務を前に横着を決め込む。そんな無頼の偉丈夫が、人の上に立つ立場にいるのが不思議だ。しかも近衛長である。軍全体を統括する將軍の指

揮下には属さない、女王直属の独立した精鋭部隊。そのような特別な部隊を束ねる長ともなれば、軍隊の格式は最高位の将軍に次ぐほどにもなる。大変な高位だ。

それほどの地位は罰として与えられたのだと、若い衛兵は噂に聞いた。

「目の届く所に置いておかねば、この男は何処までも怠ける」
それが女王が述べた理由だそうである。

その目論見は甘かったのか正しかったのか。間近でオルセトの働き振りを見てきたはずの彼にも判断がつかない。就任から一ヶ月、オルセトがしてきたことといえば、昼寝と警らと言う名の散歩。夜な夜な侍従や女官たちの部屋を訪ね歩いていたことぐらいであろう。しかし件の事件が起こってからオルセトの働きぶりは見事だ。

アルマメイオスの指揮する搜索隊に加わり、自ら部下に細やかな指示を送るなど、献身的である。

前任のウィダルナが規律と厳格の人だっただけに、オルセトのこれまでの行動は部下から反発を招いてきた。いや、距離感を図りかねる、というのが正しかったのかもしれない。若い衛兵から見限り、一転して仲間たちは、オルセトに好意と信頼を寄せ始めているようだった。

そんな掴みどころの無い上官が、珍しく慚然とした顔で言った。
「顔を貸せ。話がある」と。

オルセトの態度は素っ気無いほどであった。「はい」という返事さえ待たずに、踵を返し一足先に歩き出す。若い衛兵は慌てて後を追った。その背後に二人の供人がびたりと張り付く。

二人の供は近衛を表す朱色ではない、すみれ色の兵装をしている。憲兵隊の者だ。

隊長と憲兵がなぜ？

異様な取り合わせと、異様な雰囲気。そして異様な圧迫感。

……なんだか嫌な感じた。

彼の心臓の鼓動は一段、早くなった。

石造りのアーチが幾重にも重なる回廊を歩く。

天井も壁も床も、立ち並ぶ列柱も。白亜の王宮は差し込む日の光を浴びて美しく輝く。

それら建築物のそこかしこには、草木が育ちにくい風土の中で生まれ発達した、この国特有の建築様式が伺える。計算され尽くした曲線美だ。それは至る所に刻まれ描かれた、細やかな幾何学模様の中にさえ見出すことができた。

そもそもは梁にする木が足らず、土を捏ねて作った煉瓦を組み合わせて門を作ろうとしたのが始まりだったと言う。それが『無限の象徴』という世界観を表す芸術にまで昇華されたのだ。

この国が恐れられながらも称えられるのは、そういう所にあるのかもしれない。

若い衛兵は改めてそのようなことを思った。

やがてオルセトは、ひとつの扉の前に立った。王宮の西の棟に急遽作られた、女王搜索の為の対策室である。

「俺だ、入るぞ」

返事も待たずオルセトは戸を開いた。するとそれを咎める厳しい声が飛んだ。

「オルセト。ノックはどうしたのです。それから返事を待って部屋

に入ってきて下さいと何度も言っているでしょう」

扉の先に居た人物は、書類に走らせている羽根ペンを止めて、憮然とした顔でそう言った。中肉中背の体つきながら、華奢で繊細と印象付けてしまう端正な顔立ちである。それが鋭い目で睨みつけているのだから、なかなか迫力がある。

「あなたは礼儀を知ってる癖に、どうしてそう破るような真似ばかりするのです。そんなことでは部下に示しがつかないでしょう」

「そう怖い顔をするな、イスヤホート。俺とお前の仲ではないか」

気安いオルセトの言い草に、一転、にこりと笑んで男は言い放った。

「あなたのそういう所、大嫌いですよ」と。

イスヤホートは誰より将来を嘱望された若人であろう。王国の柱に名を連ねる名門貴族の一員であった彼は、十七歳でドーフィネの会戦に参戦し、同年齢で戦死した父や兄たちに代わり当主の座に就いた。その後、王軍へ身を投じた。

イスヤホートの専らの役目は前線に立つことではなく、後方に在ってアルマメイオスやオルセトを支援することだった。それは彼にしか出来ない重要な役目だった。貴族たちとの交渉である。

新設されたばかりの王軍は、人々への認知がまだまだ不足していた。イスヤホートは理解と援助を求めて、貴族の間を奔走したのだ。

アルマメイオスやオルセトのような華やかな功績はない。だが人

と人と繋ぐ地道な行いは、やがて軍と貴族の双方から「万事如才無く、公明正大」と、絶大な信頼を得るに至った。その信頼を買われて、彼は弱冠二十二歳にして、王国と軍の秩序維持にあたる憲兵の長を務めることになった。

しかしその役職は一過性のものだろうと噂されている。

かつて女王はイスヤホートを「王佐の器」と評した。

「いずれ宰相にもなる」人々は彼をそう目したのだ。

それほどの大器はオルセトを絶句させると、二人の部下にねぎらいの言葉をかけ、部屋から下がらせた。そして、「どうぞこちらに」と丁寧な口調で、若い衛兵に椅子に掛けるよう傍に招く。

「俺も同席させてもらってもいいな」

オルセトがそう訴える。「勿論」とイスヤホートは頷くと、腰を下ろした衛兵に『あくまでも穏やかに』話しかけた。

「さて、あなたを此処へ招いた理由ですが、単刀直入に申しませう。あなたにはとある嫌疑が掛けられています。あなたが何者かの命を受け、怪物をけしかけて陛下をかどわかしたという疑いです」

「……はっ？」

何を言っているのか理解できない。そう物語る十分な間があった。その後に続いた間抜けな驚きの声など意に介さず、イスヤホートは冷然たる微笑を浮かべ話を続ける。

「あなたに怪物を解き放ち陛下をかどわかすよう命じたのは誰ですか？ トルバザード公ですか？ エルファダ殿ですか？ それとも

バラクーム？ バルマキー、ピヤーレ、ハマディン、オルロン、アルクトウール……」

驚きで薄く開きつばなしになった口から、カタカタと音が鳴りだしていた。次々と並ぶ賢人たちの名前。それは若い衛兵から比べれば、雲の頂に居るような者たちばかりだ。脳が現実を拒否したのか、ぐるり、世界が揺らぐような眩暈を感じて、彼は椅子に体をのけぞらせた。その背後に控えるオルセトがゆっくりと剣を引き抜く。首筋に冷たいものが突きつけられる。それを横目で見ながら、彼は淡々と響くイスヤホートの声を聞いた。

「……それとも、この全員ですか？」

獅子と狂人 4

日も暮れ皆が寝静まった夜。誰もいない謁見の間に一人、サトウヌースは天井を見上げていた。

なんとという大広間であろうか。一切の華美を省いた昼間の厳かな装いは何処へ。夜となった今は、まるで清廉な淑女のように姿を変えている。一つの玉座、三つの扉、九つの彫像、十八の大窓、三十六の円柱、そしてドーム型の高い天井には七十二の星辰が煌いている。

「そら恐ろしいほどよ」

天井の中心、渦巻く光の中に漆黒の塊が見える。星星を喰らう深淵、アバドンという名の闇が。もっともあれらは複製。天象儀の技術を応用したものだが。それでも震えが走る。その美しさと途方もなさに。

何故このようなものを天井に写したのか。サトウヌースはそう不思議がった。人がこの世に生まれた落ちた時から天に戴くことになるあの闇は、免れえぬ死の象徴であつた。そのような不吉なもの、この王宮にそぐわないではないか。

或いは免れえぬからこそ意味があるのか。ゴドーの首都、ルーヴェン・レイエ陥落の一報が舞い込んだとき、玉座に在った女王は天を見上げ冷めた声を洩らした。「灰燼より生まれ灰燼に帰す」と。あれは浮かれ騒ぐ者たちを諷めたものだと思つていたが、そうではなかったのかもしれない。人の営みも国の興亡も、いずれは塵芥のように還る、あの闇の前に。真意はそうであつたのかもしれない。

ならば我らが立つ今は何だと言うのか。過去を重ね未来を紡ぐ。その先に待つのは滅びであり、全てが等しく塵と化すのならば、今を生きることになんの意味があるのか……。

「なにを小童のようなことを」

サトウヌースは自分を笑い飛ばした。慣れぬことは考えるものではないと、ぐるり首を捻る。すると暗がりから静寂を破る声が響いた。

「ここに居たか。探したぞ」

人影が歩み寄る。月明かりを星星へ。姿を変えて降り注ぐ、青白い明かりの下に現れたのは、アルマメイオスだった。

「ぬしがわしを探すなど珍しいこともあるものだな。体の方はもうよいのか」

「問題ない。だがおかげでイスヤホートに叱られてしまったがな。『貴方は何でも一人で抱えすぎる。少しはオルセトを見習うがいい』だそうだ」

「ぬしを叱り付けるとは、あれも顔に似合わず剛毅よの。しかしオルセトを見習えとは傑作な」

一頻り笑った後、サトウヌースは表情を引き締めた。

「しかしアルマメイオスよ、日が明けるまで今少し休んでおれ。あやつらの中の幾人かが、自領に引き上げようと動きを見せておる。我らは夜明けと共に行動を移さねばならん。なんせ大貴族どもが一

同に会するなどそうはない。この機会を逃さず一網打尽にせねばならん。一人でも逃せば後々面倒なことになるからの」

「奴らは誅さぬ」

「……なんだと」

サトウヌースは顔色を変えた。「女王を拐かした逆賊」という罪を捏造し、合法的に大貴族たちをこの世から葬り去る。それが稀代の謀略家が描いた目論見だった。それを破棄せよと言つのである。サトウヌースは立腹した。

「既に実行犯は仕立て上げた。罪状も作らせた。後は奴らを捕らえ処断するだけだ。ここにきて中止とは何を言つておる。悠々と、ままごつのような権力闘争をしている暇など我らには……」

「怪物はいた」

低い、張りのある静かな声が、尖り声を遮った。

「そうであろう、サトウヌースよ。イスヤホートとオルセトが独自に調査を進め、結論付けたのだ。」

『怪物はいた。そしてそれを井戸に匿ったのは、前任の近衛長ウィダルナである』と。

ウィダルナが何故そのような真似をしたのか。残念ながら理由までは突き止められなかったが……。

そつえば貴様、ウィダルナとは旧知の仲であつたな。

……なにを隠している、サトウヌース」

獅子の両眼に火が宿る。静かな、逆らいがたい威圧感。なんたる

男よと、サトゥヌースは舌を巻いた。内より震えが走る。膝を折り、許しを請いたくなる。しかしそれ以上の恐れを、かつてサトゥヌースは経験していた。この身に刻まれた呪いと比ぶべくも無い。そう薄く笑う。

「忌まわしい体よの。この手足が思うように動けば。かつての栄光が一欠けらでもあれば。そうすれば盗んだ酒などではなく、小僧の首を手土産に出来たものを……」。

否、そうであるならば、ぬしに頼る必要さえなかったか。

何も隠し事などない。わしの目的は一貫しておる。欲するは奴らの首よ。その為ならばぬしを欺き、グズめと尻を叩くのも厭わぬわ」

「貴様……！」

発作的にアルマメイオスは剣を引き抜いていた。裏切られたという思いが、彼の怒りに火を点けた。剣先が躊躇いのない軌跡を描く。頭上に頂く底無しの闇と白銀の剣が重なる。死を前にして、サトゥヌースの目は爛と輝いた。

「わしを斬るか、アルマメイオス。よいぞ、この汚い首など幾らでもくれてやる！　だが犬死だけにはしてくれるなよ。わしの首を刎ねたなら、返す刃でトルバザード共を討て！」

なんたる狂気……！　怒りを忘れ、アルマメイオスは総毛立った。まさか大貴族へ対する恨みがこれほどのものとは。垣間見たおぞましさの正体を断ち切るように、アルマメイオスは剣を振り下ろした。

白髪が数本、宙に舞った。

落胆の色を見せるサトゥヌースと、苦渋を滲ませるアルマメイオス。二人の視線が交錯した。

「どのような理由であろうと、俺が貴様に大恩を受けたことに変わりはない。だがな、これきりだ。私的な恨みを晴らすために、これ以上俺を利用しようとするのならば、今度こそ貴様を斬る」

アルマメイオスは剣を鞘に収めた。押し込めた怒りに腹が振れんばかりだった。これ以上会話を重ねるなど、辛抱できたものではない。早々と踵を返す。立ち去ろうとする後姿に、サトウヌースは尋ねた。

「ひとつだけ答えよ、アルマメイオス。あの小僧はどうした。化物の看守を任されたばかりに、人生を狂わせることになったあの哀れな小僧は」

「……生きていても貴様らのいいように利用されるだけであろう」

「殺したか。ぬしも権力者というものが板についてきたではないか」

サトウヌースのくぐもった笑い声が響く。振り向かない背中は、辛辣な皮肉に何も答えようとはしなかった。ただ沈黙を守り、止めた歩みを再び進める。そして暗がりの中に身を溶け込ませ消えていった。

「事は大成せずか。まあよい。目的のひとつは果たした」

再び大広間に独り。サトウヌースはそうぼつりと零した。そうして頭上の闇を見上げる。また童子のようなことを考える。それは老いたればこそ立ち返る思い。死期は近いかもしれない。他人事のようにサトウヌースは思った。灰燼より生まれ灰燼に還る。その前に成さねばならないことがある。

「しかし、遠いの……」

壇上にぼつりとある、なんの変哲もない椅子に目をやり、サトウ
ヌースはそう声を洩らした。

進展……

明くる朝、早々に復帰するという見通しのとおり、アルマメイオスは何事もなかったかのように執務室へと入った。彼が姿を見せなかったのはたった一日の事だったが、それでも安堵の声が漏れた。不在の間、代わりに指揮を執ったイスヤホートが何かを滞らせたわけではない。重厚な黒檀のテーブルについた彼の威風を見て、「我らを指揮するに相応しいのは、やはりこの男をおいて他にはいない」と、誰もが示し合わせたようにそう思ったのだ。

もつとも、今更彼が細々とした指示を送る必要は何もなかったのだが。各部隊長は、既に自分たちがどのような行動を取るべきか、十二分に把握しているのだから。

一つ、王都内に怪物を封じ込め、

二つ、市民の協力を仰ぎ、

三つ、これを見つけ出すこと。

女王搜索の指揮を執ることが決まるや否や、アルマメイオスが示した方針である。これに沿って搜索活動は続けられてきた。城門や港、運河には検問が敷かれ、人や荷物が厳しく改められた。市民には城郭内に怪物が存在すること、有力な情報を提供した者には報奨金が与えられるとが公布されている。広域を搜索する各部隊は、日増しに互いの連携をより緻密に、より柔軟なものへと深めていった。そして一方で、イスヤホートとオルセトによって、秘密裏に捜査は続いている……。

目の前で繰り広げられる活発な発言。合間に混じる和やかな冗談。室内は芳しい雰囲気だ。最善を尽くす部下たちに、これ以上何を求

めることがあるだろう。今や彼の仕事は部下を信じ、後方に在ってただじつと「待つ」ことだけであつた

事態が動いたのは三日後のことである。

広大な湖の只中に立つ建築途中の巨大な塔より、報告はもたらされた。

「羽根の生えた異形の者が空より現れ、奴隷をさらひ飛び去つていった」と。

件の怪物を彷彿させるには十分な、愕然たる報告であつた。

アルマメイオスは当初、女王は怪物によつてさらわれたものだと信じていた。だからそれに然る手を打つたつもりだ。搜索に進展は見られず、大貴族たちからは「搜索活動を根本から見直すべき」と、女王の失踪を公表するよう暗に迫られたが、敢えてこれを退けた。最悪の事態に対し打つた手は、最良の一手である。そう信じたからだ。

それが全て裏目にでた。伝説では風雷を呼ぶ竜や、太陽を掲げる巨大な金鳥などがいると聞くが、まさか人をさらひ空に飛び立つような化け物が実在するとは……。

「だから我らは言つたであらう。陛下の失踪と怪物の逃亡を関連付けて見るのは安直すぎる。二つは個別の事件として扱うべきだ！ お前は我らの忠告に従ひ、もっと早く陛下の失踪を公表すべきだつたのだ！」

大貴族たちはこれ幸いとアルマメイオスをなじつた。こじつけである。公表に伴う混乱の責任を押しつけ、可愛げのない犬ころを奈落の底に突き落とす。その為に彼らはそのような忠告をしたのだから。迂闊にその提案を採用していたら、アルマメイオスはあらゆる

地位を剥ぎ取られ、王都から追放されていただろう。

そのような不逞な輩にいらぬ抗弁をしている暇はない。アルマメイオスは速やかに搜索の手を城外へと伸ばした。すると湖の周囲の集落から、翼を持った怪物の情報が幾つも寄せられた。

「夜半すぎ、昇る月の中に大きな影を見た。影は東の方へ、何かを大事そうに抱え飛んでいった」

総じてそのような情報である。

それらの話から、搜索隊は湖の東岸を重点的に調べ上げた。そうして岩場に隠れた洞窟を発見した。偵察が送り込まれたが、彼らが戻ってくることはなかった。その洞窟にこそ陛下はおられるに違いない。アルマメイオスは兵を率いてエンジュローグを出ようとした。しかしトルバザードがそれを許さなかった。

「武装した賊どもがこの王都を狙っているという噂がある」
そのような馬鹿げた理由で、出兵の願いは取り下げられた。

「トルバザードめ、何を考えている！」

振り上げた拳をテーブルに叩き付け、アルマメイオスはそのような怒号を轟かせた。肅然としながらイスヤホートは思った。執務室にしているのが自分ひとりだけでよかったと。このような姿は余り人に見せるものではない。

「大貴族たちの動きが慌しいですな。自領に引き上げた者が三名。いずれもエンジュローグに近い領主たちです。それに王都や周辺の集落で私兵を募っている者もいる様子。一体何を企てているのやら」

イスヤホートの報告に、アルマメイオスは、ちっ、と舌打ちを零

した。

「人の足を引っ張ることにかけては優秀な奴らだからな。俺から手柄を横取りしよう、そのような魂胆であろう」

「それもあるのですが、彼らは貴方のことを怖れているのですよ」

「怖れる？ 俺の何をだ」

「近隣諸国に鳴り響く名声。兵士や市民から寄せられる絶大な信頼。そして何より、貴方は決して大貴族たちには組しない。獅子という名の身中の虫。本質的な敵です。そのような男が陛下を独占できる好機を得ようとしているのです。彼らが慌てふためくのも無理もないでしょう」

その指摘に、アルマメイオスは苦笑いを浮かべ、呆れたように首を振った。

「やれやれ。やつらの頭の中では、俺はどのような大それたことを仕出かしているのやら」

「そうですね。『陛下を救い出したアルマメイオスは、勢いに乗じて王都を占拠し、我らを追放してしまうのではないか』。このような感じでしょうか。実際貴方にエンジュローグに立て籠もられでもしたら、誰の手にも負えません。陛下の名の下、彼らに叛徒の烙印を押すことも可能でしょう。如何です？ いっそ彼らの恐れる通り、行動に移してみては？」

そう薦めるイスヤホートの口調には、悪い冗談として片付けられ

る軽やかさがあつた。だが受け手側にはこの時、著しく柔軟性が欠けていた。

「焚きつけるな。俺はただ陛下が無事にお戻りになれば、それでいいのだ」

そのような陰謀めいた話はもう耳にしたくなかつたのだろう。不愉快に顔を歪めてアルメイオスは話を一旦閉じた。腕を組み、椅子に深く背中を預け天を見上げる。ため息が漏れ、次いで零れたのは苦い声だつた。

「腹立たしいものだな、こうも踊らされるとは。奴らが何を思おうとかまわん。だがな、何故それに俺が付き合わねばならんのだ」

「閣下、短気は困りますよ。例えば仮初であろうとトルバザードは選ばれた統治者。王の命を無視し、みだりに兵を動かしたとあれば、貴方の責任は免れません。それどころか王軍そのものが鼎の軽重を問われましょう」

「分かっている。だからこうして我慢しているのだ。だがどうすればいい。奴らが陛下を救い出すのを指を咥えて見ていると言つのか……いいや、百歩譲ってそれは構わん。だが奴らが無事に陛下を救い出せると思うか？」

「思いませんね」

「であろう。あれほど近視眼で欲深い者たちだ。近く互いを憎みあうことになるだろう。差し詰め『誰が陛下を救いに向かうのか』そのような理由でな」

それはそれで面白いと思うのだが。などとは口が裂けても言えない。代わりにイスヤホートは、新たな答えを提唱した。

「我々は動けない。そして大貴族たちには期待が持てない。となれば、陛下を救い出すのは第三者の手によって、ということになりま
すね。……そういえば、今朝からオルセトの姿が見えないよう
です
が」

「……まさか、陛下の下へ……単身で向かったのではないだろう
な
！」

勢いよく椅子が倒れる。直感的に思い当たった危惧が、アルマ
メ
イオスをそう叫ばせていた。そして残念ながら、それは的中した。

「どうやらそのようですね。彼の部下たちは何も変わらず任務に
当
たっていますから。独断専行を好むあの人らしい行動です」

「よもやオルセトにいらぬことを吹き込んだのではあるまいな」

疑いの目がイスヤホートを睨む。「とんでもない」と、見た目麗
しい優男は慌てて首を振った。

「私がそう薦める前に、彼は城を飛び出していったのですよ」

「……まったく、いつもこいつも」

どうして俺の部下はこのような者ばかりなのか。アルマメイオス
は疲れ果てたように首を振った。その様を見てイスヤホートが苦笑
しながら言う。

「どうです。この際、オルセトに陛下の救出を任せてみては？」

「確かにあれはこの国一の勇者だがな、果たして怪物を相手に勝てると思うか？」

「彼以外の何者にかないましょう」

ふむ……、とアルマメイオスは腕を組んだ。

「どのみち俺にあれを止めることは出来ん。そのような権限がないのだからな。こうなつては嫌でも任せるしかあるまい。……とは言え、やはり指を啜えて見ているだけ、といのも腹が立つ」

「とすれば？」

「なに、邪魔はせん。どうせなら存分にいらぬ世話を焼いてやろう、そう言っているのだ」

アルマメイオス是不敵に笑った。

……そして意外な結末

夜半過ぎ。湖の東、岸部近く。高い岩場に囲まれた開けた窪地の中で、男たちは浮かれた声を上げていた。数は五十名ほど。幾つかの組に分かれ焚き火にあたる男たちは、酒を仰ぎ騒いでいる。如何にも柄の悪い粗野で粗暴な者たちばかりだ。

と、岩場の合間から人影が現れた。酒宴を開く男たちの仲間である。その男は仲間たちの下へではなく、ぽつりと離れたところにいる二人組に向かって、のろのろと駆けていった。

「洞窟に変わりはありません。野郎も出てくる気配はないですぜ」

わざとらしく息を切らし、男はそう報告する。二人組の一人、背の高いひよろりとした男がそれに答えた。

「うむ、ご苦労。向こうで冷えた体を温めるがいい。代わりの見張りを立てるのを忘れるなよ」

「へい」

頷くと男は、二人組のいま一人、顔に布を巻いた覆面の男を見やり、へっ、と小馬鹿にしたように笑った。そうして仲間の所へと駆けていった。

「無礼な奴だな」

腰ほどの高さの岩に座り込み、片膝を立てて酒を仰ぐ覆面の男がそう言った。ひよろりとした男が畏まる。

「すみませんね。どうも教育がなくなってなくて」

「まあよい。贅沢は言えん。お前たちのような者でも居るだけましだからな」

「えっへっへ。酷いおっしやりようだ。流石はエルファダ様。賢人ともなるお偉い方は言うことが違う」

杯を仰ぐ手をぴたりと止めて、覆面の男——エルファダは、唸るように声を荒げた。

「貴様……。その名前は口にすると聞いただろう」

「いや、申し訳ない。つい約束事を忘れてました」

男はへりくだって頭を下げたが、誠意はまるで感じられなかった。むしろエルファダを馬鹿にするような慇懃無礼な素振りである。そうやって図っているのだ、エルファダの器量を。狡猾で陰険。そして漂う只ならぬ凄み……。それも当然であろう。夜盗の頭目ともなれば。

エルファダがこのような男たちと手を結ぶことになったのは必然であつたろう。

当初エルファダは、怪物を倒し女王を救い出すことを目的として動いていた。翼の生えた化け物の報告がもたらされ、それを知るや下男を使い人集めをさた。だが、これはうまくいかなかった。『こちらの素性と目的は話さず、それなりに腕の立つ者を、一人でも多く、密かに集める』。そのような多くの制限が任務を困難にしたのだ。

領地から頼りになる者を呼び寄せたい所だが、目立ってしまう。そしてなにより距離がありすぎる。時間との戦いを強く意識していたエルファダは焦っていた。そのような時に接触してきたのがこの男である。名はシャダム。聞けば夜盗の長であると言う。酒場や裏路地で人を集める下男の不自然な動きは、裏の世界の者たちに立ちどころに知られていたのだ。

考量の余地はなかった。怪物が潜む洞窟の場所が発見されたのだ。エルファダはシャダムを雇い、すぐに洞窟へと向かった。しかし一足早く駆けつけたオルセトを見かけ、この場所で待機させるよう命じたのである。

「それで、若様は何時まで此処でこうして酒を喰らってるんです？」

「何時まででもだ」

「物見遊山つてわけですか。確かに月が綺麗だ……って、そんな馬鹿な。だったら俺たちを雇う意味がないでしょうが。目的は洞窟の探索でしょう。どうしてここまで来て足を運ばないんです」

「どうしてもだ」

「まったく。ちつとは俺たちを信用してくださいよ。若様の本当の目的、教えてもらえませんかねえ」

「目的は洞窟の探索。それだけだ」

答えになってない答えである。つまり相手にする気がさらさら無いのだ。シャダムはため息を漏らした。

シャダムはこの洞窟に怪物が居ることを知らない。当然ながら、女王が此処に居るであろうことも。大貴族のひとり、エルファダが動いているのだから、何か大変なことが起こっていると勘付いてはいるが。それだけに必死なのだ。不和、悶着、面倒事。波風立つところに金は転がる。上手く出し抜き全てを掻っ攫う。その為にも情報には貴重だった。

「……あれ、洞窟に入っていったデカブツ。あれはオルセトでしょう」

唐突にぼつりとシャダムはそう呟いた。エルファダの動きがぴたりと止まる。分かりやすい反応に、シャダムはこわい顎髭をさすりほくそ笑んだ。

「女王の剣にして盾。精鋭揃いの近衛隊の隊長がこんな所になんの用ですかねえ。いやはや、何かとんでもない秘密がありそうですね、あの洞窟には」

「下らぬ詮索は身を滅ぼすぞ」

「いやいや、決して興味本位で詮索してるわけじゃないんですよ。大金をいただくからには、しっかりと仕事をしたいじゃないですか。こう見えて結構仕事熱心なんですよ、私どもは。ねえ、あの洞窟には何があるんです。教えて下さいよ」

そう畳み掛けるシャダムに、「いい加減にしろ！」とエルファダは怒鳴った。

「お前たちの目的はひとつ。これからあの洞窟から出てきた者を始

末する、それだけだ！」

「……洞窟から出てきた者って、オルセトを？ 冗談でしょう」

とんでもないと言うように、シャダムは激しく首を振った。

エルファダは一足早く洞窟へ入るオルセトを見付けて考えを変えた。「オルセトと怪物を相打たせ、どちらかが洞窟から出てきたところを急襲すればよい」と。つまり漁夫の利を狙おうと画策したのである。ところがだ、肝心のオルセトと対峙する者が激しい拒絶を示し始めた。

「俺はあの男の戦いぶりを間近で見たことがあるんですがね、あれは間違いなく化け物ですよ。左の一刺しで一人を突き殺し、右の一振りで別の者の首を刎ね飛ばす。剣舞なんてものがあるでしょう？ 酒の席で披露する踊りのような。オルセトはあんな風に、舞うようにして人を殺していくんだ」

そう語るシャダムは何故か自慢げである。目に宿る輝きは憧憬からくるものであるのか。そうと分かるだけにエルファダは腹が立つ。

「……オルセトがなんだというのだ」

酒をぐいと飲み干し、エルファダは低い声を上げた。シャダムの態度はエルファダの自尊心を逆撫でするものだったらしい。覆面の隙間から覗く据わった目に、シャダムは慌てた。

「ど、どうしたんで？ 若様……」

「オルセトがなんだと言うのだ！」

空いた器を投げつけ、エルファダはシャダムに掴み掛かった。襟首を掴んだ両手が、ぎりぎりと言を締め上げる。二人の只ならぬ気配は具に周囲に伝わった。騒ぎは止み、男たちは二人を注視している。

「……や、止めるエルファダ。仲間が見てる。俺に何かあれば、やつらはお前を許さんぞ。死にたいのか！」

「構うか！ 答える！ オルセトがなんだと言っのだ！」

「……英雄。エストラゴンを……斬った男、だろう」

「英雄だと！？ そのエストラゴンがなんだと言っのだ！」

シャダムを突き飛ばし、エルファダは叫んだ。

「いいか、よく聞け。あの戦場に居たのはアルマメイオス、オルセト、エストラゴン、それだけだ。俺はいなかった。そうであるうが。もし俺が同じ戦場に立っていたのなら、奴ら三人の首などとうに刎ねとばしているわ！」

何を無茶苦茶言ってやがる。シャダムは咳き込み、声にならぬ悪態をついた。こんな男についてくるのではなかったと後悔がこみ上げる。後悔せずにいられるものか。ぶつぶつと呟くエルファダの独り言が聞こえる。

「……オルセトめ、俺の愛しいアイリーンを寝取ってくれおって。目をえぐり、鼻を殺ぎ、耳を落とし、首を捻じ切ってやる。貴様の糞袋ぶちまけて、アイリーンの墓に添えてくれるわ……」

女……。それも痴情のもつれか。つくづく下らねえ。シャダムはゆらりと立ち上がった。仲間の前で恥をかかされて黙ってられるほど温厚な男ではない。彼の手が短剣に掛かる。賢人だか大貴族だか知らないが、酒に吞まれて人様の胸倉を掴むようなガキには躰が必要だ。その身に刻まれ二度と忘れられないような、痛い痛い躰が……。

一方男たちは、シャダムの凄惨極まる躰をよく知っていた。揉み合う二人にそれを危惧したのだろう。シャダムが短剣に手を掛けた時、既に数名の者が二人の間に入る為に間近に迫っていた。

そのうちの一人が突如、「ぎゃっ！」と悲鳴を上げて倒れ込んだ。苦悶にのた打ちまわる男。見ればその背中には、一本の矢が突き刺さっている。

「誰がやりやがった！」

シャダムの怒号が響く。「あそこだ！」と男たちが岩場の上を指差した。青白い月明かりの下、弓を片手に悠然と佇む男の姿が映る。

「イスヤホート！」

「ほう、私の顔を知る者がいるのですか」

エルファダの叫び声に、イスヤホートは満面の笑みを浮かべた。

「何故お前がここに！」

「噂に敏いトルバザード公が教えてくれたのですよ。国に仇なす賊

がいると。私は憲兵隊隊長。この国を護るのが使命。ならばあなたが討伐するのは私の役目でしょう」

「叔父上め……！」

エルファダは齒軋りをして恨み言を吐いた。しかしこれは逆恨みもいいところである。そもそも他の大貴族を置いて抜け駆けをしたのはエルファダなのだから。トルバザードがこの事態を知っていれば、アルマメイオスを城に留めるのに、いまましな言い繕いをしていただであらう。

「お前ら！ これは大事の前の小事。むしろお前たちの力を示すいい機会だ！ 見事あの男を討ち取ってみせろ！ 奴の首を俺の前に持ってきた者には、金貨千枚をくれてやるぞ！」

顔を晒して投降する気はさらさらないらしい。エルファダはそう叫んで男たちをけしかけた。賊と関わり合いがあると分かれば、最悪縛り首も免れないのだから必死である。だが利用される方はたまったものではない。

「馬鹿野郎、なんてことを言いやがる！」

エルファダの口を押さえようと、慌ててシャダムが掴みかかった。だがそれは遅きに失した。提示された破格の金額に男たちは目の色を変えた。剣を抜き、熱狂的な声を上げて、イスヤホートの立つ岩場へと殺到する。

「愚か……！」

さつと右手を振り上げ、イスヤホートは合図を送った。すると物

陰に隠れていた部下たちが岩場の上に姿を表した。その手には既に矢をつがえた弓が握られている。空に輝く満月の如き、十分に引き絞られた弓が……。

「放て！」

弓弦の響きに悲鳴が重なった。四方八方から矢を射られ、男たちは瞬く間に混乱に陥った。助けを求める者、逃げ惑う者、応戦しようとする者……。そして地面には、続々と痛みにもがく男たちが折り重なる。しかし容赦なく矢は射込まれる。窪地は阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。

「これはいかん」

離れた岩陰に隠れ事態を見守っていたエルファダは、男たちに見切りをつけ逃げ出そうとした。それに批難の声が飛ぶ。

「てめえ！ 煽るだけ煽って逃げやがるのか！」

「うるさい！ 気品あふるる麗しい俺の役に立って死ねるのだ。ありがたく思え！」

同じく岩陰に隠れるシャダムに、エルファダは振り返り様そう捨て台詞を吐いた。だが、何か分厚い塊と衝突し、勢いよく転んだ。

「クソ、さつきから何だと言うのだ、畜生！」

気品あふるる麗しい貴族は何処へやら。地面に突っ伏してエルファダは悪態をついた。その前にさり気無く手が差し出された。「……ああ、すまん」と、野太い手を取り立ち上がったエルファダで

あつたが、借りた手が何者の手であるのかを知り、みるみるうちに顔色は青ざめていった。

「ア、アルマメイ——」

言い終える暇もなかった。無造作に振り払われた腕に打たれ、エルファダは吹き飛んだ。顔を覆った布が瞬く間に血で染み渡ってゆく。

「……ひい……」

今まで聞いたこともない声が臓腑の奥から零れた。赤髪の屈強な男が冷え切った目で睨み据える。その迫力に気圧され、エルファダは凍りついた。

体が動かない。

這い上がる戦慄が体の自由を奪う。ゆっくりと引き抜かれる剣。

エルファダはそれを、死刑執行を待つ囚人のように、ただ見ているしかなかった。

「何をばさつとしていやがる、馬鹿野郎が！」

大喝と共に、シャダムが二人の間を風のように駆けて割った。そして去り行く間際、勢いに任せてエルファダの衣服を引つ掴む。それに反応して、弾かれたようにエルファダは起き上がった。脱兎の如く、二人はその場から逃げ出していった。

「……ふん」

赤髪の屈強な男は、逃げ出したエルファダとシャダムに目もくれなかった。元々興味がなかったのかもしれない。それよりも今は乾

いていた。沸々とたぎる怒りを解放し、己の獣性を満たせる場所を求めて……。

悲鳴と怒号が渦巻く誰かの死地へ。アルマメイオスは躍り出た。

「オルセトの為の露払い」と称した鬱憤晴らしは、最早語るまでもなくアルマメイオスらの大勝に終わった。だがそれに浮かれている暇はなく、事後処理を全てイスヤホートに任せて、アルマメイオスは急ぎエンジュローグへ取って返した。トルバザードらの目を盗んだの強行だっただけに、露見すれば面倒なことになる。一刻も早い帰還を目指し、馬を早駆け乗り継ぐこと三度。エンジュローグに到着したのは、まだ皆が寝静まる仄暗い暁の頃であった。

幸いにもアルマメイオスの取った軽率な行動は、トルバザードらに知られることはなかった（実は、人知れず動いたサトウヌースの陽動があったからだ）。無事にアツシャリフの丘の私邸に足を踏み入れることが出来たアルマメイオスは、ようやく張り詰めた緊張を解いた。

そのまま日が明けて皆が動き出す頃、アルマメイオスは何事もなかったかのように執務室へと入った。数刻してトルバザードがやってきて、案の定イスヤホートら憲兵隊が城内にいないことを問い詰めてきたが、難なくこれをかわした。そもそも憲兵隊が動く口実を与えてしまったのは他ならぬトルバザードである。それを指摘し、体良くこれを追い払うと、アルマメイオスは久しぶりに大声で笑った。

あれほどの上機嫌な將軍を見るのは初めてかもしれない。昨夜の

うちに何かあったのではないか。事情を知る部下たちはそう噂しあった。そして誰もが予感していた。今日でこの未曾有の事件は終わると。アルマメイオスの笑顔にそう確信したのだ。

そして待ちかねた報告がもたらされたのは、昇る日が傾き、辺りが鮮やかな黄金色に彩られる夕暮れの頃である。イスヤホートが立てた使者がやって来て、女王とオルセトを無事保護したことを告げた。アルマメイオスは大いに喜んだ。途中までは。

「それは……どういうことだ……？」

その顔は奇妙に歪んでいた。呻き声は血を吐くようであった。報告は詳細であり、それが理解できないアルマメイオスではなかった。だが余りに予想外の結末に、脳が現実を受け入れることを拒否したようであった。

確かにあの洞窟に怪物と女王はいた。怪物は見事打ち倒され、無事女王は救い出された。だがそれを成したのはオルセトではなかった。手柄を上げたのはわずか十四歳の少年。それも、自分たちが死地へと送り込んだ、ユオと呼ばれる若き衛兵だった。

墮とされたところは

煙立つ湖に船が出る。

それは女王が救い出される五日前のこと。エンジュローグの港から一隻の船が、濃い朝霧の中へと出航した。乗船者は十三名。居並ぶ顔は面の皮の厚い、一癖も二癖もありそうな者たちばかりだ。しかしその中に、一人だけ場違いな者がいた。黒い髪と奥深い鳶色の目が印象的な少年である。

彼の名はユオといった。つい昨日まではアツシャリフの丘の住人であったが、一夜明けた今は一転して罪人である。罪状は將軍への不敬罪。彼にそんな覚えはない。当然だ。ありもしない罪を着せられたのだから。

ユオにそのような罪を着せたのは他でもない、アルマメイオスだった。將軍にして賢人。王国屈指の権力者からすれば、ユオなど取るに足らぬ小者である。だがサトウヌースが巡らせた奸計は、少年を無視出来ない存在へと変えてしまった。アルマメイオスは恐れたのだ。サトウヌースがユオを利用し、大貴族たちを葬り去ろうとしたように、今度は大貴族たちがユオを利用し、自分たちを葬り去ろうとするのではないかと。

これを防ぐ為には、ユオを謀殺してしまうのが一番だったろう。だがアルマメイオスの良心は頑にそれを阻んだ。となれば、ユオの身柄を早急に確保し何処かへ移す他ない。自分たちの管理下にあり、尚且つ大貴族たちが手を出せない所へと。思いつく限りそのような都合の良い場所はひとつしかなかった。監獄である。

つまりユオは権力闘争に巻き込まれて、『島流し』の憂き目にあ

っているわけだが、当の本人はそれを知る由も無い。訳のわからないことの連続で、今や茫然自失としてしまっている。彼の頭には昨日、オルセトとイスヤホートに告げられた事実が繰り返し響いている。

『ユオ。君は近衛兵ではないのですよ』

『近衛兵の定員は二千人。その全員の名簿はある。だがお前の名は乗っていない』

『思うに、貴方を近衛隊へと誘ったのはウィダルナ本人ではないですか？』

『つまりだ、お前は怪物の飼育係として雇われたんだ』

ユオはうな垂れた首を僅かに振った。おかしいと思っていたのだ。精鋭が揃う近衛隊の中に、自分のような子供が居ていいのかと。背は小さい。力はない。腕が立つわけでもなく、だからといって頭が切れるわけでもない。精々文字が読めることと、ほんの少しだけ礼儀を知っている、それだけだ。

「だから頑張ったんだ。邪魔にならないように。少しでも役に立てるように。馬鹿にされたって耐えてきたんだ。なのになんだよ、この結末は……」

手首に掛けられた手枷がぼやけて見える。慌ててユオは目頭を拭いた。自分は何も悪いことをしていない。何を泣くことがあるだろう。そう唇を噛み締めて、涙を流さぬよう食いしばる。自分の正しさを言い聞かせること。それだけが今の彼の支えだった。

「おい、見ろよ」

一人の男が声を上げた。何時しか止んでいた風が吹き始め、朝霧は次第に晴れようとしていた。湖の只中に建つ巨大な塔が、その輪郭を露わにし始めている。

「この距離であのかさか。やっぱりとんでもねえな」

「建て初めたのが百五十年前。そして百五十経つてもまだ完成はしないだろう、そう言われる塔だからな」

「何でも空を突き抜けた向こうを目指してるらしいぜ。意味が分かんねえよ」

「バビロン（神の門）の名は伊達じゃないってことだろう」

囁き合う男たちの声はどこか不安げである。それはユオも同じだった。これから向かう島が罪人と奴隷の流刑地であることは知っている。だがそこでは何が行われていて、自分がどのような目に合うのかは想像もつかなかった。その怯えた心を表すかのように、ユオの目にはそびえ立つ巨大な塔が異様に禍々しく映って見えたのだ。

日もそろそろ高く差し掛かるつかという頃、船はようやく目的の島へと辿り着いた。栈橋に降り立ったユオたちは兵士に引き連れられ、切り立つ岩肌に伸びる石段を登っていった。その頂では、高い塀と如何にも頑丈な門がユオらを出迎える。

「まるで要塞だ」

誰かが啞然とした声を上げた。正解である。当初これら建造物は、灯台を兼ねた湖上要塞を目的として造られたものなのだから。実際にゴドー軍の侵攻の際には、難攻不落の要塞として活躍している。エストラゴンに「孤島ひとつ奪えぬ為にこのざまか」と恨み言を残させるほどに。ゴドー軍はこの島があるばかりに湖の支配権を手中に収められなかった。その結果、夜闇に乗じて湖を渡ったアルマメイオスに補給拠点を急襲されるという、痛恨の失態を招くことになったのだ。そして物資が尽きたゴドー軍は、悪夢のような撤退劇を演じなければならなくなるのである……。

歴史が示すこの島の堅牢ぶりは、例えそれを知らない無知蒙昧な者にも届くだろう。その物々しさに、不屈きな男たちも流石に肝を潰したようだった。しかし石と鉄で出来た分厚い門扉が開き、その内情が露になると彼らは思うのだ。「自分の考えはまだ甘かった」と。

高い天に手を伸ばすように、石とレンガを積み上げ造られる螺旋の建造物がそびえ立っている。バビロンという仰々しい名前が付けられた塔だ。だがそれは塔というよりも、山のような異様な大きさだ。使役される者たちが、まるで群がる蟻のように見える。

切り立つ島の中に、これ程の広さの敷地を切り開いただけでも驚きなのに。百五十年という時間に、一体どれだけの資金と労力をここへ注ぎ込んできたのか……。この島へ流された者は二度と外へは戻れないという。自分もここで骨になるまで働き続けるのだ、そんな現実が、ユオに重く押し掛かる。それは他の男たちも同じだったようで、皆一同に声を失ってしまった。

「ようし、お前ら」

引率の兵士から引き継ぎを終えた看守が、呆然と佇むユオたちに声を掛けてきた。こけた頬と釣り上がった目、狐を思わせる男である。

「まずはようこそ、この腐れた島に。俺はネザル。そして後ろにいる色男は俺の弟だ」

振り返るとそこにはネザルとそっくり、狐のような男がいた。どうやら二人は双子の兄弟のようだ。弟が愛想よく男たちに手を上げ笑いかける。

「さて、まずはこの島がどういう島で、お前たちがどういう身分なのか知ってもらおうか。お前とお前とお前。前に出る」

口こそ悪いがネザル兄の態度は気さくである。指名された男たちは苦笑いで互いの顔を見やると、それに従い大人しく前へと進み出した。ネザル兄は親しげな笑みを浮かべて男たちに近づくと、一人の男の肩を抱き言った。

「お前ら、船に乗るとき言われただろう？ 私語は禁止だって」

ひねりの利いた拳がみぞおちに突き刺さった。息もできず、男は喘いだ声を上げてその場に崩れ落ちた。一瞬にして凍りつく男たち。ネザル兄は残る二人も、問答無用で殴り飛ばしてゆく。

「……痛えな、何しやがる！」

手枷がなければそのまま掴み掛かっていたかもしれない。腹を殴られた男が、呻きながらもネザル兄に吠え掛かった。しかしその途端、男は勢いよく地面へと突っ伏してしまう。弟に後ろから蹴り飛

ばされたのだ。ネザル兄弟はそのまま倒れた男を激しく蹴りつける。やがて男はぴくりとも動かなくなってしまった。

「おい、この目障りなバカ、どつか捨ててこい」

横柄な態度で傍にいた同僚にそう指図すると、ネザル兄弟は血走らせた目を男たちへと向けた。

「これで分かっただろう。お前たちは奴隷だ。しかも最下層の奴隷、罪人奴隷というクズだ。そのクズのご主人様が俺達つてワケだ」

「腐れた島の腐れた住人。そしてそれをしめる腐れた看守たち。それがお前ら腐れたクズどもの腐れた現実つてわけだ」

「腐れたクズ同士、楽しくやっていこうぜ。……なあ、ユオ」

愉悦に酔った顔がユオへ向けられる。ユオはたちまち凍りついた。血の気が引き、鼓動が跳ね上がる。狂犬のような二人に目を付けられてしまった。でも何故？ 答えは出ない。と言うより、何も考えられなかった。

僕はどうなってしまうのだろうか？

そんな無意味な問い掛けだけが、頭の中を彷徨っていた。

ブランド

天を貫く螺旋の塔バビロン。その土台は、強固に組まれた七つの階層によって成る。各階にはこの星を取り巻く七つの惑星——球層の概念が込められている。すなわち一階は土星、二階は木星、三階が火星で四階が太陽、五階が金星、六階が水星、そして七階が月である。

これら階層を渡す長大な階段を、ユオはネザル兄弟に連行され上らされていた。今まで同じ行動を共にしてきた男たちはいない。なぜかひとり引き離された状況である。

逃げ出したい。ユオは心底そう思っていた。喜んで人を暴行し、蹴り殺してしまうような男たちと共に行動しているのだ。何処に向かおうとしているのかは分からないが、これから自分がろくでもない目に合わされるのは間違いないだろう。

そう分かっていながらも、ユオにはどうすることも出来ない。逃げ場など何処にもなく、この状況を覆せる力もない。少年は願う。何事もなくこの危うい状況から逃れられますようにと。無力に、まるで嵐が過ぎる去るのを震えて待つ家畜のように。

不安におののくユオが連れていかれたのは第四の階層、太陽の間と呼ばれる広間だった。その内部は外観の偉容さに比例して広いが、どうにも薄暗く殺風景である。

そもそもこの独創的な建造物は、星星の観測を目的として造られた古代の天文台だった。それを塔を支える基礎とすべく、強度と大きさを増して今へと蘇らせたのだ。古代であればこの大広間にはた

くさんの観測者たちがいて、星星の動きから正確な暦を割り出そうと活発な研究がなされていただろう。

しかし今現在、広間にはまるで人影がない。柱ばかりが立ち並ぶ間仕切りのない造りが、むしろ使い勝手を難しくさせているのだろう。壁際には資材が積まれ、そして何故か広間の真ん中にはぼつりと天幕が張られている。

「そこだ」

煌々と明かりが灯る天幕に向かってネザル兄弟は歩いてゆく。中に一步踏み入るや否や、むっとした暑さがユオたちを襲った。

「バルパス監獄長、ユオを連れてきました」

「うむ、ご苦労」

天幕の中に先にいたのは、蓄えた髭が厳めしい初老の男だった。見ればその顔には大粒の汗が滴っている。それもそのずだ。机にしているやに低い奇妙な台座の脇では、石で囲われた即席の暖炉が赤々と燃えている。まだ冷える夜でもないのに、天幕の中は異常な温度だ。

「お前がユオか」

バルパスが歩み寄る。大柄な男だ。その風体は歴戦の勇士といった印象である。頭から爪先まで、舐るような視線がユオに絡み付く。やがてバルパスは髭をさすりながら、腑に落ちないと言わんばかりの顔を浮かべた。

「……ふむ。アルマメイオスに無礼を働いた不屈き者と聞いたが、そうは見えんな」

「……僕はそんなことしていない」

俯き、ユオは不貞腐れた声を上げた。年長者に対する礼儀を欠いたその態度は、自暴自棄に陥った少年のそれである。曲がりなりにも近衛隊に身を置いた者とは思えない姿だ。そんなユオに対し、バルパスはさしたる変化もなく尋ねる。厳めしい風体にして寛容な男なのかもしれない。

「ほう。そんな覚えはないと言うのか。では何故お前はこのような所にいるのだ」

「知らないよ」

「知らんとはまたおかしなことを言うな。お前は公正な裁判を受けて此処に来たのではないのか」

「あんなものが公正であるものか！」

興奮の余り、ユオは思わずバルパスに掴み掛かった。

オルセトから呼び出しを受け、罪人としてこの島へと流されることになった一連の中で、ユオが受けた仕打ちは惨いものがあっただろう。全てを否定され、無視され、裏切られ、何が起きているのかさえ理解出来ぬまま、このような所へ流されてしまった。そんな中に現れたバルパスは、初めてユオの声に耳を傾けてくれる大人だった。少年が思わず取ってしまった行動は、大人への反発であり、そして何より甘えだったのかもしれない。

しかしそれは、決して取ってはならない行動だった。

「何しやがるガキ！」

すかさずネザル兄弟が動いた。兄がユオの髪を掴みバルパスから引きずり離すと、弟が真横から蹴りを見舞う。ひとたまりもなく地面に倒れたユオを、ネザル兄弟は容赦なく踏み付けた。

その行いをバルパスは黙って見ていた。この島で暴力沙汰は日常茶飯事だ。看守が奴隷を、奴隷が奴隷を、そして時には奴隷が看守を襲う。奴隷たちの大半は、凶悪な罪を犯して此処へと流されてきた者たちだ。言い聞かせてどうにかなるような連中ではないのだ。力でねじ伏せその体に思い知らさなければ、この島の秩序は保たれない。

しかしネザル兄弟のそれは常軌を逸していた。他の看守たちが自身を守る為や秩序維持の為に力を奮うのとは違い、ネザル兄弟は暴力そのものを目的として力を奮った。言わば暴力に酔っていたのだ。

「止めよ！」

見るに見かねたのだろう。弟がユオの顔を蹴飛ばしたところで、バルパスは声を荒げて制止した。舌打ちさえ聞こえてきそうな不満げな顔で、ネザル兄弟は少年の前から離れる。顔を押さえたうつユオ。口と鼻からは血がとめどなく滴り落ちる。

「立て、ユオ」

バルパスがそう促した。「冗談だろう？ 押さえた両手の隙間から、

そんな非難の目が覗く。かまわず今一度、バルパスは強い口調でユオを促した。少年は仕方なくよろよろと起き上がった。

「ユオよ。ではお前は、行われた裁判は正当なものではなかったと言っただな」

「……はい」

「ならばお前はそれを、声を大にして訴えたのか」

「そんなこと言ったって、どうせ僕の言うことなんて誰も聞いてくれないじゃないか」

余りにも弱々しい声がユオの口から漏れた。その一言がこの少年の全てだったのかもしれない。大人の都合に振り回され、心も体もすっかり傷ついてしまった彼が、自信をなくして卑屈になってしまいうのも無理はない。しかし裏を返せばそれは甘えだ。僕は悪くない。悪いのは大人たちなんだ。僕は何も分らない。無力なんだ。だから分かって。僕を助けて……。けれど現状はそれを許してくれない。むしろ事態は悪化するばかりだ。事実、ユオが見せてしまった剥き出しの脆弱さは、ついにバルパスの怒りに火を点けてしまったのだから。

「見苦しいわ！ 小童！」

張り上げた怒号は見事なものだった。余りの迫力に、ユオは小さな悲鳴を漏らして床にへたり込む。

「自分が正しいというのなら、何故それを胸を張って公言せんのだ！ 後からうじうじめそめそと、見苦しいにも程がある！ 大体な

んだ、その無様な姿は！ 儼に掴み掛かった先ほどの勢いはどうした！ この老いぼれの声がまだ大きいと知るや尻込みか！ 情けない小僧め！」

迫力に押されてユオは黙りこくった。その煮え切らない態度がますますバルパスを苛立たせる。怒れる老兵は懷から一通の手紙を取り出すと、「見よ」と少年の前にそれを広げた。

「アルマメイオスより送られてきた書状だ。これにはお前を罪人としてではなく、一線画して扱ってくれと書かれている」

確かにバルパスの言う通りだった。これから送られてくる少年の処遇を配慮してやってほしい。書状には丁寧な文句でそうしたためられていた。偽善と言えはそれまでだが、少なくともアルマメイオスは、自分の都合で人生を捻じ曲げてしまった少年のことを忘れたりはしなかったのだ。

ただ文面の最後には、このような一文も添えられている。

『ただしこの者が貴殿の意にそぐわぬような者であれば、これに及ばず』と。

その一文に答えるかのように、バルパスは書状を破り捨ててしまった。

「七難八苦。この世に理不尽など腐るほどあるわ。だがそれがどうした。お前も男なら、己の胸にけして折れぬ矜持を持て」

そう言い放つと、バルパスは傍らを過ぎっていった。

何が剛直な老兵の逆鱗に触れてしまったのか。ユオにはまるで分からなかった。ただ、自分が見捨てられてしまうことだけは直感的

に理解できた。床を這いずりユオは言う。「待つて、行かないで」と。すがりつくような女々しい声を上げる。しかし頭上では無情な声が響いた。

「後は任せる。ただし、殺すなよ」

遠ざかる背中を呆然と見送る。その背後では、ネザル兄弟が冷めた顔でユオを見下ろしていた。

「だってさ兄貴」

「はあーああ。まったく、面倒臭え……なっ！」

ネザル兄の足が鞭のようになつた。こめかみに強い衝撃が走る。ひとたまりもなくユオはその場で昏倒した。

そして次に目覚めた時、彼の体はあの奇妙な台座の上に縛り付けられていた。

「お、起きたか。なあ、だから言っただろう。ちゃんと生きてるって。手加減して蹴ったって」

「ホントかよ。どうも兄貴は危なっかしいな……」

馴れ合うネザル兄弟の姿が映る。強い衝撃を受けて記憶が混濁しているのだろう。彼らを見上げているこの状況が、ユオにはさっぱり理解できなかった。ただ酷く気分が悪い。眩暈と吐き気、それに何だか息苦しい。起き上がりうとして初めて気付く。自分の体が拘束されていることに。

「なんだ、一体どうなってるんだ！」

ユオは慌てた。体がまったく動かないのだから、叫びたくもなるだろう。それもそのはずだ。両手両足、胴に首と、太い皮のベルトが食い込んでいる。ベルト自体は台座にしっかりと固定されていて、力任せに引つ張った程度では外れそうもない。

「どうだ、皿に寝そべってみた感想は。なかなかものだろう」

「……皿？」

「ああ、皿だ。お前がいま寝転がっているそいつはな、遥か昔、神に供物を捧げる為に使われた台座なのさ」

ひつ、とユオは悲鳴を上げた。想像の翼をほんの少しはためかせれば、その供物がなんであつたのかはすぐに分かることだ。あまりのおぞましさに総毛立つユオを見て、ネザル弟は声高に笑った。

「噂だよ噂。あんまり兄貴の言うことを間に受けるんじゃないぞ。……でもまあ、その台が拷問具として使われてきたのは本当だけだな」

耳を塞いでしまいたかった。もう何も見たくなかった。「止めてくれ！」と、ユオは目を閉じ激しく首を振った。ネザル兄弟は互いの顔を見合わせ首を竦める。

「なんだよ、これからが本番なのに。しょうがない奴だな」

「まあいいさ。こんなクソ熱い所にいるのもいい加減うんざりしてたんだ。とつとと用件を済ませて、プリシアでもからかいに行こう

ぜ」

「もう少したぶってやろうと思ったんだがなあ」

目を閉じて暗闇に逃げ込んでも、彼らからは逃れられない。むしろユオの脳は主に異様な幻覚を見せる。どちらが兄でどちらが弟なのか。互いの体を溶け合わせた醜くおぞましい姿となって、ネザル兄弟はユオの耳にまわりついてくる。

「さてユオ。これからこの島の事情について、少しばかりお勉強をしようじゃないか。大事なことから、しっかり聞いてくれよ」

「まずは基本的なことからだ。現在のところこの島の人間は、二つの階層構造に分かれている。支配者と被支配者だ。この辺りは島の外と変わらないだろう？ 王様と平民、雇用主と労働者、男と女……まあそんなカンジだ。この島風に言い換えるなら、俺たち看守とお前たち奴隷、となるわけだ」

「ここからが少しばかりややこしい。よく聞けよ。この奴隷がまた二つに分けられる。一つはお前のような罪人奴隷。そしてもう一つは正真正銘、なんらかの事情によって奴隷となった者たちだ」

「さてここで問題だ。この二種類の奴隷。俺たちはどうやって見分ければいいと思う？」

回答を求められたユオは口を噤んだ。何を答えても結果は同じ、どうせ嵐のような制裁が飛んでくるだけだ。そう思い、身を固くして備えたのだが、一向に何も起こらない。ただ噛み殺した笑い声が聞こえるだけだ。いいような不安がこみ上げる。やがて不気味な空白の時間は、ドン、と重い音と共に破られた。

何かと目を開くと、台座の端に一本の棒が突き立っていた。押し当てられた所からは、きな臭いにおいと共に煙が上がっている。焼きごてだ。ユオは身を震わせる。

「そうさ。見分けがつかないのなら、一目見て罪人だと気付くような、目立つ印をつけてやればいいのさ」

焼きごてを取るとそこには、虫食いのりんごの模様が鮮やかに浮かび上がっていた。拘束から逃れようと目がくユオの頭上では、調子外れの陽気な声が響いた。

「大丈夫だよ。俺は兄貴と違って優しいから。ちゃんと手加減してやるって」

「死んじまうとジジイが煩いからな」

熱せられた鉄の棒が迫る。ユオはもうもがかない。小刻みに震えるほど体を硬直させ、迫り来る現実をただ凝視するだけだ。

天幕を越えて、がらんとする広間にまで、ユオの絶叫は響き渡った。

森しい

乾いた荒野の中に、少年は一人座り込んでいた。

彼の家族はもういない。

水、金、食料。それら僅かな荷物を残して何処かへ行ってしまった。

地べたに座り込み、空を仰ぎながら少年は考える。これからどうしようかと。

見上げた空は青く高く、自分はあまりに自由すぎて。何処へ行けばいいのか、何をすればいいのか、途方に暮れてしまう。

こんなことでは駄目だ。

少年は立ち上がる。これから独りで生きてゆくのだ。もっと強く賢くならねば。旅人がこの荒野を流離わぬように、星を読み、その旅路を定めるように。

何時までもこのような所で足を止めているつもりはなかった。膝を抱えて拗ねていても、彼らはけして戻ってくることはないのだから。

少年は荷物をまとめ背に抱えた。そして最初の一步を踏み出した。すると突然、脆く大地は碎けた。

「あつ」

伸ばした手が虚しく空を掴む。暗闇の中、ユオは荒い息を吐き出

していた。

どうやら夢を見ていたらしい。それは既に忘却の彼方に消え去ろうとしていたが、僅かに残った欠片から、自分が何を見ていたのかは大方の予想がついた。

ちがう、これは夢なんかじゃない。記憶だ。父に捨てられた記憶。

今更どうしてこんなものを見てしまったのだろう。深く息を呑み、ユオは乱れた呼吸を整える。疲れているのだろうか。そういえば体はやたら重くて痛い。頭はくらくらして、耳なりが酷い。どうやら風邪を引いてしまったらしい。気を付けないと、任務に差し障ってしまう……。

「動かないで。やっと熱が下がってきたんだから」

もそもそと起き上がるうとした時だった。誰かがそう止めに入った。若い女性の声だ。肩に掛けられた手つきは柔らかく優しい。

「君は誰？」

ユオはまだ夢現の中で微睡んでいるのだと思った。そうでなければ自分の寝所に女性がいるはずがないと。暗闇の中に映る幻想の影は、ユオの質問に小さく頭を振る。

「朝になったら教えてあげる。だからもう少し眠りましょう」

「でも、水が飲みたいんだ」

「分かったわ。ちょっと待って」

女性はそう言うのと脇から水差しを取り出して、「さあ」とユオに起き上がるよう促した。言われるがまま少し体を起こした所で、彼女は体を滑り込ませてユオを支える。

唇に冷たい陶器の感触が触れた。なんて現実味のある夢なんだろう。ユオは喉を鳴らして体の奥へと冷えた水を飲み込む。潤いが体を巡る。水差しから口を離し一息つくと、ユオは彼女に礼を言った。

「ありがとう」

「どういたしまして。さあ、体が冷えるわ。横になって」

肩を支えていた手が離れ、ユオは体を横たえる。

暗闇の中にぼんやりと映る彼女の顔は、微笑んでいるように見えた。

再び目を閉じてユオは思う。こんなにも優しくされたのは、生まれて初めてかもしれない。幼い頃に母を亡くし、異母兄弟に虐められ、しまいには父に捨てられて。家族の愛情など一度として感じたことはなかった。独りになってからもそうだ。騙され、奪われ、蔑まれ……。世間の狭量さを嫌というほど知った。唯一、人らしく扱ってくれたのはウィダルナ様だけだった。そのウィダルナ様も……

「ウィダルナ様も……？」

ガチツ、と奥歯が震え鳴った。それは更なる早さを増して、瞬く間に全身へと伝わり広がってゆく。その震えと共に、奥深くに封じ込められていた記憶が蘇る。のた打ち回りたくなるような痛み、屈辱と恐怖、どうしようもない現実が容赦なくユオを鞭打つ。

「どうしたの？ 寒い？」

ユオをの只ならぬ様子を見て、彼女は心配そうに背中をさすった。毛布の端をぐつと握り締めて、ユオは身を固くして苦痛をやり過ぎそうとしている。今はそれに必死で、彼女の声に耳を傾けている余裕などなかった。

不意に柔らかなものがユオを包んだ。羽織っていた毛布を解いて、彼女がユオを抱きしめたのだ。すっぽりと同じ毛布にくるまる二人驚きで、ユオの震えはぴたりと止まった。

「ほら、寒くない」

彼女は胸にユオを抱いて髪を撫でた。とても愛おしいものを扱うように。

「ありがとう……」

夢でも幻でもいい。

ユオは彼女の胸の中で密やかに泣いた。

明くる朝、瞼の裏にまで差し込む真っ白な眩しさで、ユオは目を覚ました。

次第に意識がはつきりとしてくる。

灰色の天井。大きな窓から覗く青空。並び空いたそまつなベッド。白い布で仕切られた部屋。その向こうから響くたくさんの人の話し声……。

辺りの気配を感じ取りながら、ユオは記憶の断片を繋いで、現状を把握しようと努める。

「なんて皮肉なんだ」

気づいてユオは力なく笑う。どんなことにでも対応できるようにと、隊に身を置いていた時に叩き込まれた教えじゃないか。こんな目にあっても僕はまだ忠実であろうとするのか。本当に泣けてくる。

そういえばこんなことも教えられたっけ。
必要とあらば、速やかに自決すること。

「だったら、必要がないから死んでしまうのは、別にかまわないのかな……」

「なに暗いこと言ってるんだい」

突如目の前にぬつと人影が現れた。とうを食い、すっかりしわがれた老婆だ。思わずきゅんと悲鳴を上げて、ユオは毛布の中へと逃げ込む。

「おうおう、可愛らしい反応だねえ。まるで初夜を前に恥らう花嫁のようだよ」

明け透けに笑う老婆の声が聞こえてくる。
加えてもう一人、その老婆を皮肉る女の声が聞こえてきた。

「そんなことを言っつて、本当に分かってらっしゃるのかしら。ついであなたには縁の無かった体験ですけど」

「なあに、花は紡がれるのを嫌ったのさ。それより恥じらいがない
と言えば、嫁いだ先で食い意地に見覚めた挙句、醜い姿に愛想尽か
されて離縁された女がいたねえ」

「あら。私はただ甲斐性のない男を見限っただけですわ。それにし
ても嫌みつたらしい口をきくババアですわね」

「ババアがババアにババアと言うのは、どうも片腹痛いものがある
ねえ。いつもの悪罵のキレはどうしたい。坊やを前に猫かぶってん
のかい」

「人には持つて生まれた品性というものがありますのよ。私はあな
たほど性根がねじくれ曲がっちゃいませんの」

どうにも閉口する言い争いが、毛布一枚隔てた向こうで繰り広げ
られている。事態は飲み込めないが、そのうちこちらにまで飛び火
してきそうな気配だ。ユオは逃げ出そうと算段を図り始めたが、そ
れは遅きに逸した。

「大体あんたも起きてるんだったら、いい加減毛布から顔をだして
挨拶くらいしな！」

強引に毛布がはぎ取られる。蓑を窺われた毛虫のような、体を丸
めた情けない姿を露わにして、ユオはおずおずと挨拶をした。

「おはようございます」

「それだけかい！」

小柄な老婆が鋭い口調でそう責める。「ひっ」と、肩を竦めるユ

才。すかさず傍にいた豊満な体の中年女性が、言葉足らずの分を補う。

「礼がもうひとつ足りないのでは、と言ってますの。怪我と熱でうなされていたあなたを、誰が此処まで連れてきて看病してきたと思っ
っているのですか」

「……そうだったんですか。ありがとうございます。助かりました」

起き上がり姿勢を正してユオはそう礼は言った。だが、内心では「やっぱり昨夜のことは夢だったのか」と残念に思っていた。どうせ看病してくれるのなら、年を食った女性よりは若くて美しい女性の方がいい。随時と失礼な考えながらもそれは、男ならば仕方のない率直な下心である。

「それでどうだい、体の具合は」

小柄な老婆がそう尋ねた。

微熱、それからズキズキとした痛みはまだ続いている。
布が巻かれた額に手をやり、ユオは首を傾げた。

「まだ、ちょっと……」

「だろうね。一晩寝たところでどうにかなるような傷じゃない。むしろそうしてしゃべれるほどよく回復したもんだよ」

そう言う老婆。

丸い顎を震わせて、ふくよかな女性は「うんうん」と大きく頷く。

「つまり私の処置が完璧だったということですね」

「一人手柄のように言うのはやめておくれでないかい。あんたの指図に散々振り回された私たちはどうなるんだい」

聞く耳持たず。高笑いするふくよかな女性を指差し、老婆はユオに向かって面白くなさそうに言った。

「こいつは一応医者なんだがね、酷いヤブなんだよ。それでもこんな島だ。いないよりはましだから、みんな嫌々診察してもらっているのさ」

「失礼な。皆さんには喜んでもらっていますわ。口ばかり騒々しいあなたと一緒にしてもらいたくないですわね」

再びいがみ合う女性たち。目の前で声高に吠えられるのはたまらない。二人の気を逸らすため、ユオは慌てて尋ねた。

「それじゃあ、ここは病院なんですか」

「うーん、そうだけどちょっと違うねえ」

「正確に言うと此処は第三階層、火星の間と呼ばれる私たちの居住区ですわ。その一角に、この部屋を設けさせてもらいましたのよ」

「私たちが此処へ来た頃は、まだ奴隷の為の医務室なんてものがないくってねえ」

感慨深げに昔話を始める老婆とは逆に、ふくよかな女性は腹立たしそうである。

「まったく、この島の奴隷に対する環境は酷いものですわ。一体、人を何だと思ってるのかしら」

「だから奴隷だろう。人じゃないさ」

「人ではないから大事にしくてもいいというのは間違いでしょう。私たちが物であるにしても、また貴重な労働力であるにしても、だったら『壊れないように扱う』という発想は出てこないのかしら。思うにこの島にいる住人は、みな想像力が欠落しているのですわ。ですからどいつもこいつも体系を位置づけることばかり気にして、先々のことには気が回らない。そもそも人を大事にするとは作業効率という点から見ても……」

「ああ、分かった分かった。分かったからその辺でおし。坊やが目を丸くしてるだろう」

呆れ顔の老婆にそう釘を刺されて、ふくよかな女性は我に返った。ごほんと咳払いをして、彼女は改まってユオに向き直る。

「……ユオ。あなたは若い。ですから自然の治癒力は相当なものですわ。十分に休息をし、油断せず傷を清潔に保つようにすれば、十分に回復出来るでしょう。……ただそれでも、その額の火傷は跡が残りますわよ」

医者として、重い口調で彼女はそう告げた。ユオの顔に暗い影が落ちる。それを見て、老婆が吐き捨てるように呟いた。

「あの兄弟、よりもよって額に焼き印をするなんて……」

そんな憤った声に重なるようにして、調子の外れた陽気な大声が

聞こえてきた。

「おーい、此处に乳臭い罪人奴隷はいませんか」

「黒髪に鳶色の目。とつぱい顔した罪人奴隷です。心当たりのある方はいませんか」

あれだけ騒がしかった布の仕切りの向こうが、しんと静まり返った。噂をすれば影。広間にネザル兄弟が姿を現したのだ。

ユオの顔が瞬く間に青ざめた。昨日受けた仕打ちが蘇り、震えが走る。

逃げ出さなければ。そう体を起こしかけたユオの手を、ふくよかな女性が掴んだ。大丈夫だ、そう言うように彼女は力強く頷く。

「おう、本当にいた」

「お前、罪人の癖にどうしてこんなところにいるんだよ。探しただらう」

やがて病室にやってきたネザル兄弟は、ユオを見付けるなりそう咎めた。病人が病室にいることはいけな事なのだろうか。妙なことを言う兄弟は、次いでユオの額を指差し笑い始めた。

「……しかしお前、それはちょっと大げさじゃないか。どれ、傷がどうなったか俺に見せてくれよ」

顔を歪め一頻り笑った兄が、俯くユオの顔を覗き込み、額へと手を伸ばす。

と、パン！ と乾いた音が室内に鳴り響いた。

ひつ、とユオは凍りつく。

老婆がネザル兄の頬を引つ叩いたのだ。

「……痛えな、なにしやがる」

濃厚な殺意の気配を漂わせ、ネザル兄弟は老婆と向き合った。殺される。ユオは老婆の近い未来をそう直感した。だが当の老婆に怯えの色はない。むしろ自ら一步、凶悪な双子へと歩み寄り、対抗する視線をぶつける。そうして彼女は予想もつかない一言で、舌戦の口火を切ったのだった。

「私の下着に触れるんじゃない」

「……なんだって？」

「何度も言わせるんじゃない。私の下着に触るなと言ったんだ。あんたがいま手を伸ばそうとしたそれは、もともとは私の下着さ」

戦火を避けるため、離れのベッドへと避難していたユオが「えっ」と声を漏らした。隣にいる中年女性がくすくすと笑って耳打ちをする。

「ごめんなさいね。急なことだったから、火傷を覆う手頃な布が他に用意出来なかったのよ。でも大丈夫。ちゃんと洗ってあるやつを使ったから、安心してちょうだい」

なにが大丈夫でどう安心すればいいと言うのか。できれば生涯知りたくなかった衝撃の事実である。言葉を失うユオ。それを余所に、ネザル兄弟と老婆の対立は過熱してゆく。

「じゃあ何か？ こいつは夢も希望も詰まっていな、お前の臭い臭い下着を頭に被らせられている状況なのか」

「ああ、そうなるね。女の下着にくだらな幻想抱く、気色の悪いあんたの目からすると、そういう風に映るんだろっねえ」

「誰が気色悪いだクソババア。俺にそんな趣味はねえよ。ふざけるのも大概にしねえとブチ殺すぞ」

「殺すとはまた穏やかじゃないねえ。するつてえとなにかい？ アントはババアの下着に手を掛けようとして強く拒絶された。すると逆上して汚い言葉で罵った挙げ句、そのババアを始末してしまおうというわけだ」

「人聞きの悪いこと言うんじゃねえよ！ 誰がお前みたいな枯れたババアの下着なんか欲しがるか！」

「ほう、じゃあ誰の下着なら欲しいって言うんだい？」

「いちいち言葉尻を捕らえて、あらぬ事実を植えつけようとするんじゃねえ！」

「……これはどういうことなのだろう？ 双方の言い争いを見つめながら、ユオは釈然としない思いでいた。ネザル兄弟は口より先に手が出るような粗暴な男たちだ。なのに彼らは語気を荒げるばかりで、決して老婆に手を出そうとはしない。

「手を出さないんじゃないで、出せない理由があるんだろうか？」

「」明察ですわ」

ユオの独り言にふくよかな女性が反応した。

「この火星の間には罪を犯した者は一人もおりませんの。みんなとある御方に命を拾われて、奴隷となりましたのよ」

「とある御方？」

「この王国の頂きに立つ巨人。女王陛下ですわ」

なるほどとユオは小さく頷いた。道理で粗暴なこの兄弟が彼女たちに手を出さないわけだ。奴隷とはつまるところ財産、他者の所有物だ。それが女王陛下のものとなれば、流石に罪人を扱うようにはできないだろう。

そう考えてユオは疑問が湧き上がった。ここが陛下の奴隷たちの為の広間だというのなら、罪人たちは何処で暮らしているのだろう。

「それでしたら一階『木星の間』ですわ。この建造物は階層によって住む場所が決められてますのよ」

そう言う彼女は、この建造物について具体的に説明してくれた。

一階、土星の間は罪人奴隷の居住区。

二階、木星の間は食堂。

三階はこの部屋で、

四階は資材置き場。

五階から七階は看守たちの区間だと。

各階への移動には制限がかけられている。一階に住む罪人奴隷は、

許可なくして外に出歩くことさえ許されないし、女王の奴隷たちも自分たちの居住区から上の階には無断で立ち入ることは出来ない。例外は労働と食事の時だけだが、これも毎日決められた時間で区切られている。食事の時間を逃せば、二度と食えることは出来ない。それどころか、就寝、起床、食事、移動、何もかもが管理されている。当然といえば当然なのだが、この島には自由と呼べるものがあるでないのだ。

なんて救いのない島なのだろう。圧倒的な絶望がユオを打ちのめした。僕はこんな所で死んでゆくのか。擦れ歪んだ階層的支配構造そのままを体現した、この禍々しい巨大な建造物に、骨も残さず食い殺されるのか。何も成せず何も残せず死んでゆくのか……。

光も見い出せない失意の淵で呆然とするユオ。そんな彼を指差し、ネザル弟が叫んだ。

「大体ここはお前ら女王陛下の奴隷どもの居住区だろうが。わざわざ罪人奴隷を引き入れるなんて、誰がそんなことを許可しやがったんだ！」

「許可なら私がバルパスから取ったわ」

突如、凜とした声が室内に響いた。驚きで皆が振り向く。

現れたのは長身の女だった。

顔立ちはまだ若い。ユオと同じ年頃だろうか。

少し癖のある砂色の髪と、蒼然とした瞳が印象的な美しい少女である。

彼女は両手に湯気立つ器を持ったまま、煩わしげに長い髪を一振りすると、全員を見渡して強い口調で咎めた。

「あなたたち何をしているの。広間にまで響き渡る大声を張り上げて。ここは病室でしょう」

うへ、といった顔で老婆が首を竦めた。年の差を考えれば奇妙な絵図らだ。少女はそのまま歩み進んでネザル兄弟と相對する。

「おはよう、お二人とも。今朝も顔色がよろしくてね。それで、健康だけが取り柄のあなた達が、こんな所に顔を見せるとは何事？何かご用があるのかしら？」

「そこにいる罪人奴隷を連れ戻しにきたんだが……。ジジイ、いや監獄長に話を通したとは本当か」

ネザル兄の問いかけに少女は頷く。

「ええ、もちろん。疑うのならバルパスに確認してきたら」

「何故だ……」

「無礼を承知で何故とは何故と聞き返すわ。何かおかしいことでも？」

脇から弟が口を挟む。

「あのな、そいつは罪人だぞ。本来なら一階の広間にぶち込まれなければならん、お前たちが忌む罪人奴隷なんだぞ。助ける意味なんてないだろうが」

「意味ならあるわ。その子を助けることは、私たちの未来にとってとても重要なことなの。でもこれは奴隷同士の問題。あなたたち看守が立ち入れる領分じゃないわ。無用な口出しはしないで頂戴」

すみれ色の瞳に鉄の意思が宿る。少女の侵し難い気高さに気圧されたのか、「仕方がない」、そんな言葉がネザル兄の口から零れた。だが彼らがそう簡単に引き下がるはずもない。

「分かったよ。監獄長に話しが通ってるなら問題はない。俺たちも領分は心得ている。奴隷同士のいざこざにまで首を突っ込む気はないさ。だがな、お前のお供が俺たちに働いた不始末は別だ」

「何だつて！」と老婆が声を荒げた。

弟がわざとらしい悲鳴を上げて少女に訴える。

「ご覧の通りだ。人をぶつておいて反省の色がまるでない」

「不出来な従者が素直に頭を下げられないんだ。だったら主が代わりに誠意を見せるべきじゃないのか」

兄弟は薄ら笑って少女を見つめる。

反論の構えを見せる老婆といきり立つふくよかな女性を制し、少女はこくりと頷いてみせた。

「分かったわ。私の頭一つでこの場が収まるのなら安いものよ」

そう言う少女はやおら爪先立った。そして悠然と、両手に湯気立つ器を持ったままくりと一回りする。再びネザル兄弟と相対して、少女は片膝を軽く曲げて、小さくお辞儀をしてみせた。

それはカーテシーと呼ばれる女性のみがする挨拶によく似ていた。

だがよく似て非なるものだった。なぜならそれは、「誰が簡単に頭を下げるものですか」という、少女が示したささやかな反抗だったのだから。

ネザル兄弟は少女の意思を読み取っていた。だが思わず見惚れてしまうほどの可憐な動きに毒気を抜かれてしまったらしい。彼らは互いの顔を見合わせて首を竦めると、幾つかの捨て台詞を吐いて、病室から立ち去っていった。

「まったく、鬱陶しい奴らね。ねちねちクドクド陰湿で。ホント、頭にくるほど大嫌い」

ネザル兄弟が姿を消すや否や、少女はうんざりとした顔でそう言った。

先ほどまでとは打って変わって何とも軽やかな言動である。謝罪してくる二人の女性への対応も気さくだ。どちらかといえば、こちらの方が本来の彼女の素顔なのだろう。

「おはよう、ユオ」

少女はユオの前に歩み寄ると、今度はしっかりとしたカーテシーで挨拶をした。そうして呆けた顔で自分を見つめる少年の前に湯気の立つ器を差し出す。

「朝食を持ってきたわ。一緒に食べましょう」

「……ありがとう」

きょとんとした顔で器を受け取るユオを見て、「ああ、そうかと少女は照れたように笑った。

「そうね、まだ自己紹介をしてなかったわね。昨夜の約束は覚えてる？ 朝になったら名前を教えてあげるって言ったこと。私はプリシア。よろしくね、ユオ」

そう言って、プリシアは眩しいほどの笑顔を浮かべた。

「惚れるな、なんて無粋なことと言わないよ。でもね、不埒なことは考えるんじゃないよ」

「そうそう。調子に乗って『姫様に添い寝してもらった』なんて言おうものなら、嫉妬に狂った男たちに叩き殺されてしまいますわよ」

老婆とふくよかな女性が意地の悪い顔でそう忠告をする。

あながち冗談でもないかと、顔を赤らめてユオは思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8506v/>

絶対女王

2011年11月16日16時06分発行